慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バグダードの文化とその滅亡(下)
Sub Title	Baghdad, its culture and downfall (2)
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1955
Jtitle	史学 Vol.28, No.2 (1955. 9) ,p.1(133)- 54(186)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19550900-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バグダードの文化とその滅亡（下）

前嶋信次

七　蒙古軍来襲に關する資料

チョルマハン（チャンマグン）軍の活動は蒙古軍のバグダード攻略に至る先驅の如きものであつたが、前述した如く、直接その城下に攻め至つたわけではなかつた。また元朝祕史にも前節に引いたもののほかは、成吉思汗の生前において、バグダードのカリフのもとに捌児馬罕（しゅるまかん）という箭筒士のひとりを出征させたということしかのべられていない。肝腎のフラグ汗の攻城に關しては、蒙古語の史料にはこれというものがないようである。また、さしも名篇雄作の數々を世に送つたアラブ系史學界も、バグダード炎上のころは、漸く凋衰の色が濃く、全般的に見て、この事變に關する目ぼしい史籍が殘されていないのである。イブン・ハッリカーン Shams ad-dīn Abū'l-'Abbās Aḥmad b. Muḥammad b. Khallikān al-Barmakī (1211—1282) が大著「諸名士の逝去」（人名辭典）kitāb wafayāt al-a'yān を書いていたのは丁度この時期である。[六六] またタバリーの名著と竝び稱せられる「完史」kitāb al-kāmil fi't-

ta'rīkh の著者イブヌル・アシール Ibnu'l-Athīr, Abū'l Ḥasan 'Alī b. abī'l-Karam (1160—1234) は既に世を去り、その記述も西紀一二三一年で終つている。事變後に出たアブール・ファラジ・バル・ヘブライウス Yūḥannā Abū'l-faraj Barhebraeus (1226—1289) の世界史 (kitāb mukhtaṣar ad-duwal) にしても、アブール・フィダー Abū'l-Fidā' Ismā'īl b. 'Alī (1273—1331) の Mukhtaṣar ta'rīkh al-bashar にしてもバグダード陷落の事情については精彩を缺くのである。ただバグダード炎上後數年にして生れ（一二六一）、モスルの太守ファフルッ・ディーン・イーサー Fakhr-ad-dīn 'Īsā b. Ibrāhīm の保護を受けつゝ西紀一三〇〇年ころ頗る異色のある世界史 Al-kitāb al-Fakhrī fī'l-ādāb as-sulṭānīya wa'd-duwal al-islāmīya を書いたイブヌッ・ティクタカー Ibn aṭ-Ṭiqṭaqā, Muḥammad b. 'Alī b. Ṭabāṭabā はアッバース朝最後のカリフ、アル・ムスタアスィムの人物性行、並にその側近者の動靜、バグダードの滅びゆく有樣などについて可成詳細な記錄を殘している。(六七) アラビヤ語史料中では先ずこれを白眉に推さなければならぬであろう。

この事變を續つて最も豐富な史料を殘しているのはペルシャ文獻で Minhāj-i-Sirāj の Ṭabaqāt-i-Nāṣirī はその直後の一二六〇年に書かれ、Rashīd-ad-dīn の「集史」Jāmi'u't-Tawārīkh はこれについで大體一三一〇年ころに完成している。'Aṭā Malik-i-Juwainī の Ta'rīkh-i-Jahān-gushā は一二五七年、即ちバグダード攻略の前年のムラーヒダ國の殲滅までで筆をとめてあるが、歐洲に將來された稿本中には何びとかの筆による補遺が加えてあり、それにはバグダードの攻略のことが記してあるとのことである。(六八) Waṣṣāf こと 'Abdu'llāh ibn Faḍlu'llāh ash-Shīrāzī の所謂「ワッサーフの史書」Ta'rīkh-i-Waṣṣāf はジュワイニーの書の續編たることを企圖して書かれたものであるとされて

いる。(六九) ワッサーフはイル汗國に仕えて徵稅の任務にあたり、ラシードッ・ディーンの庇護を受け、一三一二年六月に、その人を通じてウールジャーイトウー Ūljāytū 汗に前記の著書を献じたのである。(七〇)

D'Ohsson, Howorth 等がその蒙古民族史中で、これらの西亞の諸史料を縱横に使用していることはいうまでもない事である。またフラグの西征時代には蒙古人は既に華北の大部分を支配していたから、相當數の漢人もこれに參加したものと見てよかろう。ドーソンは Abdallāh Beidhawi の「支那史」Historia Sinensis (Ta'rīkh-i-khatai) なるものを引き「フラグは多數のシナの學者や天文學者をペルシャに連れて行つたが、その中でも Fao-moun-dji という學者は Sing-Sing 卽ち「學者」なる名でよく知られていた。Naṣīru'd-Dīn Ṭūsī が漢土の紀年や天文の法則を學び、その天文表の作製に益を得たのはこの人からであつた」と記している。(七一) ここに「支那史」とある書物は、實は中央アジヤはシル河右岸のバナーカス Banākath (Banākīt または Fanākant) の人 Abū Sulaymān Dā'ūd al-Banākatī が一三一七年に編纂した世界史 Rawḍatu Ūlī'l-Albāb fī Tawārīkhi'l-Akābir wa'l-Ansāb (偉大な人々の歷史と家系に關する知識の園の義) 一名 Ta'rīkh-i-Banākatī (バナーカティーの史書) のことに外ならぬのである。(七二) 同書は稿本で傳わるのみで、それも極めて稀覯であるとされている。九部に別れ、第七部をインド人、第八部をシナ人、第九部を蒙古人に關する記載に當てゝいる。ブラウン氏の說によれば、著者はトランスオクシアナの出身であつた上に、イル汗國のガーザーン汗 (合贊汗) の宮廷詩人であつたから、モンゴルの王廷及びそこを訪れる多數の遠い國々の人びととも接したものに違いないし、そのインド、シナ、蒙古諸族に關する記述はラシードッ・デイーンの書からの引用が多いけれども、著者が直接に各國人から聽き知つたことどもをもつて補つていることは疑うべくもないとある。(七三)

その書中に「これまでシナの史書はペルシャにもたらされたことはなく、ペルシャの君主達もシナのことには格別の興味を持たず、それを知ろうともしなかつた。その狀態はフラグ汗の時まで續いたが、彼とともに、シナの學者や天文學者がペルシャに來た。その中に Tou Mi-tzeu があつた。この人は Shang Sang（または Sheng Seng）なる名で知られ、その意味は 'ārif と云うことである」としてある。(七四) Blochet 氏の言によれば、Charles Schéfer 氏が一八七〇年ころコンスタンチノープル所在の稿本に基いてつくつたコピーによれば、このシナの學者は Qū Min-ji というもので Siang-siang または Seng-seng と呼ばれていたとあるとのことであり、更に別の稿本によれば Toū Yen-tzeu とあるよしである。(七五) そしてブローシェ氏はこの人物の通稱であつた Sheng Seng を「聖僧 le saint lama」と解釋している。(七六)

しかし私はこの解釋には同意したくない。アブー・スライマーンの右にあげた文の續きには、ラシードッ・ディーンが修史の際に參考文獻としたシナの年代記のことをあげ、その著者の一人に Fū Hīn Khūshāng をあげている。この Khūshāng が「和尙」又は「和上」を指すことはブローシェ氏の指摘した通りであると思われるので、もし所謂 Tou Mi-tseu なる人物が佛僧だつたとしたら、Khūshāng と呼ばれるのが普通であつたと思われる。元代に佛僧を指す「和尙」「和上」に對し、道士を指して云うに用いられた言葉は「先生」であつた。このことは至元辯僞錄（大正大藏經史傳部所收）に

釋道兩路、各不二相妨一。今先生言二道門最高一。

とし、原注に「元人稱二道士一爲二先生一。」とある。一二三八年の鳳翔の長春觀公據碑にすでに道士を指して先生と呼ん

でいるが、蔡美彪氏はこれに註して、成吉思汗時代の聖旨には一般に道士のことを「道人」とよんで「先生」とはよばず、オゴダイ以後はじめて專ら「先生」とよぶようになつたと說いている。（元代白話碑集錄―一九五五、北京―頁六、註六）

マルコ・ポーロも「シャンドウの都と大カーンの驚くべき宮殿について」の項の下で、道士のことについて、

「そしてこれらの他に彼等の習慣に從つて彼等の言葉でセンシン sensin と呼ばれてゐる他の種類の僧が居るが、彼等はその習慣に從つて非常に大變な禁欲を行つて居りそして次に述べるやうに非常に嚴格で且つ荒々しいのである彼等の生活を送つている。卽ち彼等はその生涯のすべての時に於てセモラとブラン卽ち麥粉から殘された殼以外のものは何も喰べない。そして彼等は我々が豚のためにこしらへるやうにそれをこしらへる。（中略）彼等は一年に度々斷食を行ひそしていま述べたやうなそのブラン以外のものは全く何も喰べない。（中略）そして彼等は大きい偶像を澤山有し、そして時に彼等は火を拜する。（下略）」などと述べている。（岩村忍・マルコ・ポーロの研究、上卷頁二八七―二八八）

いうまでもなく今の北京音では「聖僧」は shêng sêng「先生」は hsien shêng で、その點から見れば、發音上は前者の方がペルシャ語原文に近いが、その原文も稿本により shang sang siang, siang, sang sang などともあつて一致しない。故に不完全な音譯による原文よりも、意味の方を重じ「先生」の寫しとすべきであろう。卽ち「先生という名でよく知られた Tou Mi-tzeu がいた。先生とは ʿārif を意味する」と譯すべきであろう。ʿārif をドーソンは "savant" と譯し、ブローシェは

"Dans la traduction de 聖僧 sheng seng par 〈ʿārif〉, il faut comprendre《celui qui possède la 〈ʿirfān bi-llāhi〉, qui est arrivé à la bodhi》, 〈maʿrifat〉 étant la traduction de bodhi et l'équivalent de nirvana".

と言つている。(七八)

これは「聖僧を ʿārif と譯しているが、その中に ʿirfān bi-llāhi（唯一神―アルラー―に對する理解の義）を持つ人、覺り（菩提）に達した人と云う意味を含むにちがいない。maʿrifat は菩提の譯で、涅槃にあたる言葉であるから」と云つているのである。果してどう云う根據からかわからぬが、普通では ʿirfān bi-llāhi もmaʿrifat もイスラム教に關する言葉で、ことにそのスーフィズムの用語である。特に佛教用語の譯語として用いられるものではないと私は考える。故に ʿārif も Steingass の譯語（Presian-English Dictionary）に見る如く "a holy man, a saint, the highest grade to which a mystic attain" などというのが本來の義で、もとはスーフィズムの最奥の域に達した人の義である。故にこれを應用する場合に、その對照は必ずしも佛僧としなければならぬわけではない。中國道士でもよし、ヒンヅー教の行者であつてもよいわけであろう。

いずれにせよ、相當の學識のある漢人も少からず西方に赴いたらしいから、それらによつて殘された記錄もこれまた少くなかつたと思われるが、その今日にまで傳つているものは決して多くない。

元史（巻三）憲宗本紀には、その八年の條に僅に「諸王旭烈兀回回哈里發を討つて之を平げ、その王を禽とす。使を遣わし來りて捷を献ず」とあるのみであるが、同書（巻一四九）郭侃傳には相當に詳しい記錄がある。ラシードッ・ディーンの書には、Bukatimur と共にフラグ軍の右翼の指揮にあたつた Kūkā Īlkā なる將軍の活躍が記してある。バグダード城總攻擊のときは、その東城の南門たる Kalwādhā 門（別名 Bābu'l-khalaj 後の Bāb-ash-Sharqī すなわち東城の南邊、最もティグリス河に近い所はあつた城門で、これを入れば河畔にそってニザーム學園、埠頭、市場などが

あつた）方面の討手の大將であり、落城後は三千騎を率いて市内の治安維持に當つている。郭侃は元史によれば父を德海、祖父を寶玉と云い、華州鄭縣の人で、唐の中書令郭子儀の後裔であつた。祖父寶玉は木華黎に降り、それより蒙古軍に加わつて各地に轉戰し、成吉思汗の西征の際もこれに從いサマルカンド、アム河、ヒンドゥ・クシュを經てインドの境に入つて戰功をたてゝいる。父德海字は大洋も初は金につかえて宋軍と戰つていたが、その父寶玉が蒙古軍に降つたことを聞いてこれにならい、各地に轉戰して武功を建てた。侃は字は仲和、幼にして丞相史天澤に愛重され、その家において教養された。弱冠にして百戸となつた。しばしば功を重ねて千戸となり、旭烈兀の西征軍の部將となつたのである。元史郭侃傳中の記述は、ラシードッ・ディーンやワッサーフ等西方の史家の述べる Kūkā īlkā の行動とよく符合し、信頼に價するものであることがわかると共に、更に西方の史家の傳えていない事實をも含んでいる。常德の西使記は元史郭侃傳と共通の部分も少くないけれども、互に補足する箇所にも乏しくない。この兩者とも、ペルシャ、アラブ史家と異つた觀點からした興味深い記述を殘しているのは珍重すべきである。右二史料とも早くからブレットシュナイデル、ハワース等泰西の學者によつて紹介され、その他の新史料はまだ發見されていない。しかし、その内容の解釋に至つては別問題で、更に附加すべきものがあると考える。その點は後節で觸れたいと思う。

八　蒙古軍のバグダード攻略の事情

アッバース朝最後のカリフとしてバグダードの王宮にいたのは第三十七代の Abū Aḥmad Abdallāh al-Musta'ṣim (1242—1258) であつた。先代アル・ムスタンスィル al-Mustanṣir (1226—42) の子であるが、練達豪毅のムスタンス

ィルの嗣子としては、甚しく見劣りする人物であつた。

イブヌツ・ティクタカーの書によれば、性格善良で、敬虔、人づきが柔かく、よくコーランを諳じ、美しい筆蹟を持ち、下々の者にも思い遣りがあり、言行にも節度があつたと樣々の讃辭をつらねた後、しかし決斷力に乏しく氣力がなかつた。國政に對しては全然無知で、他人の云うまゝになり、威嚴がなく、事態の眞相を看破する眼識もなく、音樂や道化に時を費やし、時として讀書することはあるも、有用の書は讀まなかつた。されば側近には人間の屑の如き佞姦の小人ばらが跋扈し、これらがカリフを自由に支配していたとのべてある。(七九)

かかる優柔不斷の人物を頂いているときに、蒙古軍の來襲と云う疾風怒濤の非常時を迎えたことは誠に不幸だつたと云わねばならぬのである。當時アツバース王朝には先代ムスタンスィルの弟ハファージー *Khafāji* の如き勇猛な傑物も居つたのであるが、權臣等が互に策謀して、かる賢主の立つことを畏怖し、性格の弱いムスタアスィムの擁立に努めたのであつた。十四世紀の史家アッ・ザハビー *adh-Dhahabi* によれば、これらの權臣の中心となつたのは Devātdār と Sharābi の二人であつたという。(八〇) デワートダールもシャラービーも共に職名であるが、その性質については後文に記すことにする。

イブヌッ・ティクタカーによれば、ムスタアスィムは卽位後しばらくは、父カリフの宰相 wazīr であつたナスィールッ・ディーン Naṣīr ad-Dīn Aḥmad b. an-Nāqid を引つづいて用いていたが、この人が歿したのでムアイヤッドッ・ディーン・ムハンマド Muayyad ad-Dīn Muḥammad b. al-'Alqamī を宰相に登用した。アラブ族のアサド部族 Banu Asad に屬する名門の出で、若い時は文學に沒頭して他にぬきん出る所があつた。書道をもよくし、人格高

潔、政治的手腕にもめぐまれ、宰相の任務を果すことに於いても卓拔であつた。學者文人を敬愛し、その書庫には一萬部の貴重書を藏していた。しかしカリフ側近の人々はこの宰相を嫉視憎惡し、百方これを阻隔したので、カリフは元來はこの人を信任愛重していたのにも關わらず、遂に殆ど國政から遠ざけ、爲に宰相はその一身を保つことさえ辛うじてであつたとのことである。(八一) まことにこのカリフの日常生活は殆ど政治を放擲して、これを權臣等にゆだね、自身は音樂、道化、曲藝などの享樂に耽つていたのである。かかる凡庸の君主が、外見のみ華かなティグリス河畔の宮殿にいて、小人等に圍繞されているのに、慓悍な數萬の蒙古軍が狐疑逡巡して容易に手を下し得なかつた所以は、イスラム教徒の元首として、殆ど神祕化された雰圍氣に保護されていたためと思われる。もしバグダードを犯してカリフに危害を加えるようなことがあれば、すべての馬匹は斃死し、軍兵は疫病で滅び去るであろう。太陽は再び天空に現われず、雨も降らなくなり、恐ろしい暴風と地震が起り、植物は枯死するであろうと云うような說が行われていた。迷信にとらわれ易い當時の蒙古人は早くからイスラム教徒と交渉があつたので、これを聞き知つて恐怖していたと傳えられている。(八二)

フラグ汗西征の二大目的は、カスピ海南方のエルブルズ Elburz 山中に據り、狂信的な暗殺者を四方に放つて西アジヤ諸國を畏怖せしめていたイスマーイール教派の俗にいうムラーヒダ國と、バグダードに君臨したアッバース王朝とを滅ぼすことであつた。一二五三年に遠征の途につき、同五七年に百七十餘年續いたムラーヒダの衆を文字通り殲滅した後は、カズウィーン Qazwīn の本營をひきはらい、フラーサーン街道について西南に向い、牙旗をハマダーン Hamadān に進め、カリフに書を送つて、ムラーヒダ國を伐つたとき、援兵を送るように要請したが、これに應じなかつたことをなじり、城壁をこぼち、濠を埋め、國政をその子に委ねて自身は蒙古軍の軍門に來り降れと云つた。「もしカリフ自身

で來られぬならば宰相（ワジール）ムアイヤッドッ・ディーン・ビン・アルカミー Muwaiyad ud-Dīn b. ʻAlqamī と、國軍の元帥スライマーン・シャー Sulaimānshāh 及びダワートダール Dawātdār を派遣せよ。この命に從うならば、國土と軍隊と人民の安全を保證する。これに從わずして戰を求めるならば、直に陣を整えて戰場を指定し來れ。わが方はすでに準備が整つている。一度び正しい怒りを發したならば、軍兵をバグダードに向けるであろう……よし爾が天の高きにひそみ、地にくぐろうとも。」と云つたとある。（八三）

これに對しカリフは能辯の士シャルフッ・ディーン・イブヌル・ジューズィ Sharf ad-dīn b. al-Jūzī とバドルッ・ディーン・マハムード Badr ad-dīn Maḥmūd 及びザンギー・ナハジュワーニー Zanghī Nakhjwānī の二人に返書を持たせてやったが、その內容は高壓的で「早くフラーサーンに歸り去られよ。强いて一戰を欲するならば我に數百萬の步騎兵あり」という意味のものであつた。勿論フラグはこのような返答をえて激怒したのである。

その時、彼の本營はハマダーン附近のパンジュ・アングシュト Panj-Angusht（五つの指の義）というところにすすめられていたが「戰の準備をして待て。蟻の如く蝗の如き大軍を率いてバグダードに進まん」と回答した。

カリフはこれを聞き、群臣と對策を議したところ、ワジール、ムアイヤッドッ・ディーンは、財寶を積むのもかかる際に役だてるためであるから、厚幣を敵に贈つて戰を避けるに若くはない。「千頭の驢馬、千頭の駱駝、よく裝具した千馬のアラビヤ駒に、その積荷とする寶物を準備し」心利き、辯にも巧みな使節にもたせてやると共に、祈禱にフラグの名を唱え、貨幣にもその名を鑄ることを申出るがよいと云う意見を出した。

カリフはこれを容れて實行に移そうとしたのであるが、ワジールの政敵ムジャーヒドッ・ディーン・アイバク Mu-

jāhid ad-dīn Aibak 通稱「小ダワートダール」 Dawātdār kūchak が他の諸將と機脈を通じてこれに反對を唱えた。そしてワジールの献策は私心より出たもので、フラグの歡心を求めんが爲のみである。我々軍を組織するものはそのため悲慘さと抑壓とを蒙むるのみである。それで我々は途中を扼し、財寶を携えた使節を阻止し、これに幽囚と不運の苦しみを嘗めさせるつもりであると申入れたので、カリフはワジールの献策を實行するのを中止したという。

そしてカリフはワジールに「我はフラグ汗と、またその兄マング汗とも親交がある。彼等は我に充分な好意を持つているに違いない。恐らく使節達の報告は虚僞に滿ちたものであろう。假に兄弟間にもまゝ起る如く、彼等が我に對し敵意を抱いたとしても、かかる不實な意圖をアッバース家ともあろうものが、何で不安に思う必要があろうか。この地表にあつて統治にあたる諸方の君長の如きは、わが兵士等と身分の等しいものではなかろうか。彼等はわが命令と禁止に柔順に從っているではないか。若しわれが一度び武力を必要とするならば、各地方から多數の援兵を集め、イランとトゥランをかの二兄弟に對して蹶起させることが出來る。されば勇氣を持ち、蒙古軍の威嚇を恐れることをやめよ云々」と云つた。これを聞いたワジールは、愈々アッバース朝滅亡の時が來たと思い、深い憂愁に沈んだという。(八四)

當時、バグダードの宮廷では善良にして柔弱なカリフをめぐつてワジール・ムアイヤッドッ・ディーンと小ダワートダール (Dawātdār kūchak 元史郭侃傳の紂答兒) ことムジャーヒドッ・ディーン・アイバクの一派が深刻に反目していたことは前述した如くである。ダワート dawāt はアラビヤ語で「墨池」「インク入れ」の義で、ペルシャ語、トルコ語にも入つているが、その構造は本邦の矢立てに似、インクをしめした綿を入れた壺とペン軸を入れる筒とからなり、帶に挾んで携帶するように作られてある。ダール dār はペルシャ語で「……を持つ人」「……係」の義であるか

ら、dawātdār はいわば「矢立て持ち」の義、權力者に仕えて書記のことなどに當る役目の人を指すペルシャ語である。カリフ、ムスタアスィムの下には大小二人のダワートダールが居つた如くであるが、特に權力をふるつたのは、小ダワートダールのアイバクの方であつた。元史郭侃傳に現れる「紂答爾」の行動は、丁度、ペルシャ史家やアラブ史家の傳えた小ダワートダールの行動と符節を合わせた如くであるから、兩者の同一人物であることは疑なく、そのことは既に Bretschneider が氣づいたところである。(八五) またかかるペルシャ語の役名を帶びた人物がカリフの王宮で勢力をふるつていた事實は、アッバース朝の制度中に多分にペルシヤ系統のものが用いられていたことの一例としてよいと思うのである。

小ダワートダールとその一黨は「ワジールはフラグ汗と氣脈を通じ、その勝利とカリフの沒落を望んでいる。彼がかかる陰謀を企てるとはまことにその人物に相應しい事である」と隨所で言い觸らせたという。(八六) ワジールとその反對者との軋轢には宗教上の原因も潜んでいたかと思われる。ワジールはもともとシーア派であつたが、西部バグダードのカルフ Karkh 區は同教派の者の密集地で、古來スンニー派市民との間に紛糾が絶えなかつた所であつた。カリフ・ムスタアスィムの長子アハマドはシーア教派を憎むあまり、軍をやつてカルフ區を襲わせ、掠奪虐殺を逞くし、アリーの末裔たるサイッド階級の人々を多く拉し去らしめるという事件を起した。ワジールはこれを痛歎し、ヒーラ方面のシーア派の中心人物等に書を以つて告げたが、その手紙は悲痛な激語に滿されていた。ワジールの反對者等が、そのカリフに對する叛意を宣傳したのはこの事件後のことだつたらしい。(八七)

ワジールの人物についてはイブヌッ・ティクタカーの書によれば、前述の如くアラビヤの名族アサド部族の出で能筆

能文雄辯、頗るの人材であつたとしてある。またその子シャラフッ・ディーン Sharaf ud-dīn abu'l-Qāsim 'Alī の言葉に「わが父の文庫には貴書一萬冊を藏していた」とあり、大に學術の士を保護したが、とりわけて語學者アッ・サーガーニー Aṣ-Ṣāghānī[八八] はアラビヤ語學に關する大著 al-'Ubāb（わたつみ）を著して、彼に献じ、詩人イッズッ・ディーン・アブドゥル・ハミード 'Izz ad-dīn 'Abd al-Ḥamīd b. abī'l-Ḥadīd[八九] はその意を受け、二十卷よりなる Sharḥ nahdj al-balāgha（雄辯の道說き）を著した。詩人達は競つてその頌詩をつくり、學識の士はその下に集つたとある。[九〇]

かかる人物が果してフラグ汗に內通したのであろうか、頗る疑問である。恐らくは反對派の人々の中傷であつたろう。しかし彼が重臣中の穩健派の中心人物として、むしろ巨額の財寶を蒙古軍に贈るとも、その攻擊を避けるのが得策であるという主張をしたらしいことはラシードッ・ディーンの記錄などに徵してもまず確實と見なければならない。

種々のいきさつはあつたが、カリフも結局はその策を用いたと見えて、バドルッ・ディーン・ダーリーキー Badr ad-dīn Dārīkī らに若干の贈物を持たせてフラグ汗のもとにやり「王よ、もし事情によく通じていられぬならば、識者に問われるがよい。そうすれば、その人は今までにアッバース家とバグダードの都とに、敢て攻擊を行つた君主らのすべては悲慘な結果しか招かなかつたことを敎えるであろう。かかる侵略者はいつも好戰的の王達であり、强力な支配者どもであつた。しかしながらわがアッバース家は堅牢な基礎の上に立つていて、最後の審判の日までは續くべきものである」と言わしめ、それから更に昔からバグダードを攻めた諸王が悲慘な運命に遭つた諸實例を擧げて說かしめた。これを聞いたフラグ汗は、激怒して使者をおくり歸し、バグダード攻略の準備をすすめたという。[九一]

しかしながら、事ここに至つて、なお、フラグ汗には最後の決斷を下すを憚る點があつた。彼が恐れたのはバグダー

ドを守るカリフの軍隊ではなかつた。それは前述した如くカリフを繞つて立籠めた神祕的の雰圍氣であつた。

元帥スライマーン・シャーの麾下にあつたカリフの兵は、初めは十萬に達していたが、ワジールの主張によつて蒙古軍の脅威下にあるのに二萬に減少されたとも云い、別說にはなお六萬の兵力を保つていたともある。(九二)いずれが眞か知るべくもないが、そう極端に減らしたものとは受取れない。

ラシードッ・ディーンの史書によるに、フラグが主な人々を集めてバグダードに進むべきかどうかを諮つたとき天文學者フサームッ・ディーン Ḥusām ad-dīn の意見をも求めた。この人はフラグ汗の側近にいて、宿營、進發などに適當な時刻を選ぶ役目をつとめていた。星宿の豫示する所を正直に言えと命ぜられるや、カリフの一族を攻め、バグダードに軍を進めるが如き行動は決してよい結果を招かぬ。古來、かかることを敢てした諸王は王位も生命も全うしなかつた。もしわが忠言を斥けて、かかる計畫を强行するならば、六つの重大な凶事が起るであろうと答えた。その凶事とはすなわち

一、すべての馬匹は斃死し、兵士中にも諸々の惡疫が起るであろう。

二、太陽が上らなくなる。

三、雨が降らなくなる。

四、暴風が起り、世界は地震でくつがえる。

五、地上に植物が生えなくなる。

六、大王は今年のうちに死ぬであろう。

フラグはフサームッ・ディーンに右の豫言を書面にしたためて出せと迫り、強いてこれを實行させた。一方バフシーbakhshi（師父）[九三]らや部將 amīr 等はしきりにバグダードへ進攻することが得策であると主張した。

ここに於いてフラグ汗は、その學識を高く評價していたナスィールッ・ディーン・トゥースィー *Khwāja* Naṣīr ad-dīn Ṭūsī に意見を求めた。ナスィールッ・ディーンはフラグに試されると思い、心中に大に恐れ、フサームッ・ディーンの列擧した凶事の如きは何一つ起らぬであろうと答えた。では何が起るかと問われ「フラグ汗がカリフに代つて世を治めるであろう」と云つた。そこでフサームッ・ディーンを召して對決させたところナスィールッ・ディーンは「イスラム教徒の一致した所傳によるに預言者（ムハンマド）の主な教友（アスハーブ）の多數が殉教の最後をとげたが、何の凶變もこの世界に起きなかつた。アッバース家に何か特別の神性があると考えるものがあるかも知れぬが、昔タ一ヒル Ṭāhir はマームーンの命でカリフ、アミーンを攻め滅ぼし、カリフ、ムタワッキルはその子を殺し、ムンタスィルとムウタッズは臣下に殺された。その他にも多くのカリフが弑虐の運命に遭つているが、格別の天變は起らなかつた」と論じた。

ラシードッ・ディーンはここに一詩をさしはさみ

この老巧な人の說を聞き
王の心は早春のチューリップをかざる
いろどりにも似し力をばとりもどしたり

と歌つているが、フラグはここに至つて最後の躊躇をも一掃し、バグダード攻略の意圖が定まつた。

先ずルーム（小アジヤ方面）地方にあつた綽兒馬罕（ペルシャ史料の Jurmāghūn）と拜住(Bāijū Nūyān) 麾下の

右翼の諸軍は、アルベラ Arbela (Irbīl) 經由モスル Mosul (Mauṣil) に集結し、その地の橋を渡つて指定の時までにバグダードの西郊に陣を張るよう命を受けた、そしてフラグ自身が牙旗をティグリス河の東岸まで進めたとき相呼應して攻撃を初めよというのである。また同じく右翼に屬していたブルガー Bulghā（ジュチの子なる Shaibān の子）トゥータール Tūtār（ジュチの子なる Sanqūr ((Sanghūr)) の子）カウリー Qaulī（ジュチの子なる Awerdeh の子）ブーカー・ティームール Būqā-Tīmūr、スーンジャーク・ヌーヤーン Sūnjāq Nūyān らは「スーンターイ・ヌーヤーンの隘路」Garīwa Sūntāi-Nūyān を越えて左翼軍に合流せよとの命を受けた。

キトゥブカ・ヌーヤーン Kītubūgā-Nūyān カドスーン Qadsūn ナルク・イールカー Nark-īlkā らはそれぞれルリスターン Luristān バヤート Bayāt タクリート Takrīt フージスターン Khūzistān 等の南方諸州、海にのぞむあたりまでの各地から參集した。

フラグ汗はハマダーンから遠くないゼキー Zekī（またはZek）の野邊に牙帳を設け、カイヤーク・ヌーヤーン Qaiyāq-Nūyān をして護衛に當らしめた。そして一二五七年十一月中旬（ヒジュラ後六五五年ムハルラムの月始め）、自ら中軍（蒙古語 Qūl）を指揮してキルマーンシャーハーン Kirmānshāhān 及びフルワーン Ḥulwān の方に向つて進發した。このときフラグの側近に從つたのはクーカー・イールカー Kūkā-īlkā（元史の郭侃）アルカトゥー Arqatū（またはUruqtu）アルグーン・アーカー Arghūn-āqā 及びカラーターイ Qarātāi やサイフッ・ディーン Saif ad-dīn の如き必闍赤（ビチクチ）（祕書官）らで、特にサイフッ・ディーンは軍奉行の中心であつた。その他ワジールの職名を帶びたナスィールッ・ディーン・トゥースィーや豫言者ムハンマドの後裔アラーッ・ディーン・アター・マリク Ṣāhib Sa'īd

'Alā ad-dīn 'Aṭā Malik その他イランのスルタンたち、マリク（王）たち祕書官たちも加わつていた。(九四)

アサダーバード Asadābād (九五) に到着したとき使者をやって、カリフに自身で來よと要求したが、ムスタアスィムは應じなかつた。更に進んでディーナワル Dīnawar に達したとき、カリフの使者イブヌッ・ジューズィー Ibnu'j-Jūzī が來て、書面を差出した。内容は高飛車に軍をひきかえせと命ずる一方、その代りには毎年一定の償金を拂うことを約したものであつた。

フラグ汗は、これはカリフが防備を整えるまで時を稼ごうとする策略であると思つたので「遠くここまで來て、カリフに會わずに、どうして軍を班し得ようか。カリフに面謁を許されたなら、これと協議し、その命をうけて直ちに去ろう」と答えた。

そしてクルド族の山 (Kuh-Girdaa) を越え、ムハルラムの月廿七日にはキルマーンシャーハーンに本營を進め、所在で虐殺と掠奪を行わした。(九六)

ここで傳令を派してスーンジャーク、バイジュ・ヌーヤーン、スーンターイ等の諸公子、將軍等に火急に本營に來るよう促した。これらの人々が來たときフラグ汗はターク・カスラー Ṭāq Kasrā という所にいた。そして一同を大にもてなした後、ティグリス河を渡り、バグダードの西方にまわるよう命を下した。一同はその慣習に從い、獸の肩胛骨を燒いて占つた後に出發した。(九七)

その後でフラグ汗は更めて使節をバグダードにやり「若しカリフにして降服の決意が出來たなら、自身にて來たれ。そうでなかつたら戰鬪の準備をせよ。何よりも先にワジールとスライマーン・シャーとダワートダールとがわがもとに

來て、こちらの提案を聽かねばならぬ」と云わしめた。そして進んでズルヒッジャの月の九日（西紀一二五七年十二月十八日）にはフルワーン河畔に宿營し、その日から同じ月の二十二日（十二月二十一日）まで滯陣した。

一方、バイジュ、ブーカー・ティームール、スーンジャーク Sūnjāq（または Sugunjāq）らはサーマルラー市の北方、タクリート Takrīt 附近でティグリス河を西に渡り、回曆六五六年ムハルラムの月の九日（西曆一二五八年一月十六日）にはアンバール附近に達した。

ドゥジャイル Dujail 運河、マリク運河、イーサー運河にそった地域の住民は雪崩のようにバグダード市内に避難して來た。

フラーサーン街道についてハマダーン方面から來襲する敵の主力を迎え擊とうとしていたダワートダール・アイバク、ムャジーヒッドッ・ディーン、イブン・ケルル Ibn Kerr（または Ibn Kurar）らは急遽ティグリス河を西に渡り、アンバール附近で、スーンジャークの率いる蒙古軍の先鋒部隊を攻擊した。カリフの軍は主に步兵よりなり、これが蒙古の輕騎兵と接戰し、善く戰つて多數の敵を斃した如くである。スーンジャークは退却して後方にある本隊と合流しようとした。

この際、老將ファトフッ・ディーン Fatḥ ad-dīn とダワートダール・アイバクとの間に意見の相違が起つた。長追いの危險なことを說いたファトフッ・ディーンの策を斥けたアイバクが、强いて急追の作戰をとらしめたのが不幸の原因となつた。蒙古軍はドゥジャイル運河のほとりで、カリフの軍を逆擊し、運河を決して水攻めの計にかけた。カリフ軍は遺棄死體一萬二千、その他多數が沼澤中で行方不明となつた。ファトフッ・ディーンを初めイブン・ケルル、カラ

ソンコル等は陣歿し、生存者は多くヒーラ、クーファ方面に逃れた。

ただダワートダールは少數の手兵と共に、血路を開いてバグダードに退却しえた。

バグダードの城壁や要砦には急いで手が加えられ、街路にはバリケードが築かれ、全市民が武器をとつて起つことを命ぜられた。

一二五八年一月二十二日（火曜）にはバイジュ、ブーカー・ティームール、スーンジャーク三將の率いる蒙古軍はバグダードの西郊に姿を現わし、ティグリス河畔の諸村落に宿營した。

またキトゥブカ・ヌーヤーン Kitūbūqā Nūyān 以下の諸將の軍は、バグダードの南方のナジャースィーヤ Najāsiyah（または Nahāsiyah）サルサル Ṣarṣar 運河地方に達した。

一方、ハマダーンを出てフラーサーン街道を進んで來たフラグ汗の本軍はハーニキーン Khāniqīn の町に來て機を窺つていたが、バイジュ等の迂廻軍のために牽制されたカリフ軍の主力がティグリス河西岸に去ると見ると、たちまちに長驅してバグダードの東郊に薄つたのである。蒙古軍の牙旗がバグダードから望まれたのは一月十八日のことであつた。イブヌッ・ティクタカーはこの時の情景を敍して

「市（バグダード）の東方ダルブ・バァクーバー街道の方に當り濛々たる塵埃の雲が立上り、全市を蔽つた。バグダード市中は騷然として亂れ立ち、人々はその塵埃の奥に何があるかを見ようとして屋根や光塔に登つた。遂にスルターン（フラグ）の軍勢がその中に姿を現わした。その騎兵團が、その輜重隊が、後續の諸隊が……。地面は彼等によつて全く隱されてしまつた。そして各方面からバグダードを包圍し、攻城に用いるあらゆる器械を動かし始めた」と目のあ

たりに見るが如くに描寫している。(九八)

フラグが本陣を設けたのは東城の東門ハルバ門 Bāb-at-Ḥalbah（今の Bāb-al-Talism）外で、そこと、東南角のブルジュル・アジャミー Burj-al-'Ajamī（波斯砦）に攻撃を集中した。部將クーカー・イールカー（郭侃）は南方の、ティグリス河に近いカルワーザー門 Bāb Kalwādhā（後の Bāb ash-Sharqī）外に陣し、カウリー、ブルガー、トゥーターール、(九九) シレムン Shirāmūn (一〇〇) アルカトゥー等は、カルワーザー門の反對側、即ち西北部にあって、同じくティグリス河に近いスルターン門 Bāb-as-Sulṭān（今の Bab-al-Mu'aẓẓam）外に屯した。蒙古軍は一晝夜の間に土壘を築いてバグダードの東城を三方からとりまき、その土をとつた濠が土壘の前面、即ち市街に面する方にあるようにした。また瓦磚を集めて高台をつくり、その上に弩砲を運び、石や石油をつめた火焔壺などをも投ずる準備を整えた。(一〇一)

總攻撃が始まつたのは一月三十日であつた。まず波斯砦の一角が弩砲の攻撃でくずれて大きな穴があいた。

カリフはワジール及び寵臣の一人イブン・ダルヌース Ibn Darnūs ネストル教の司教マキコ Makīko 等に信物を持たしてフラグの本陣にやつたが、汗は、「ハマダーンに居たときならば承知したであろうが、バグダードに迫つた今は、もはやこれでは滿足し得ぬ。更にダワーダールと軍の總帥スライマーン・シャーを引渡せ」と要求した。翌日、ワジールはサーヒブ・ディーワーン Ṣāḥib Dīwān（內務長官にあたる）の某、及び市民の代表者達と再びフラグの本陣に赴いて見たが、面會を拒絶された。

攻撃は再開され、六日間、間斷なく行われた。この間、六回も箭文を以つて、裁判官、法學者、イスラムの長老、カリフ・アリーの子孫、その他凡そ武器を執らぬ人々の生命は保證する旨を告げている。バグダード附近には砲に使う石

が乏しかつたので、三四日行程の北方地域から運ぶと共に椰子樹を伐つて石にかえた。

二月一日には波斯砦が崩れ、五日には蒙古兵はその附近から城壁に攀じ登つて、守備兵を逐つた。比較的戰況の不活潑だつたのは西北のスルターン門方面であつたが、フラグがその方面の將軍連(主にジュチの子孫等)を叱咤したので、一同勇躍して城壁にせまり、その日の夜間中には東城の全城壁が蒙古軍の占領するところとなつた。

東城が制壓されたころには、ティグリスの右岸の所謂西城はバイジュ等の率いる右翼軍の手に陷ち、バイジュ自身はタージュ宮の對岸に陣營を進め、その部下は西城の各所を劫掠していた。このことは常德の西使記に「王師城下に至り、一たび交戰して勝兵四十餘萬を破る。西城陷り、盡く其民を屠る。尋で東城を圍む」とあるのと、大體は一致している。

一方、蒙古軍はティグリス河から舟艇によつて逃亡する者を拒むために、その上下流を武裝した船(一說に船橋)によつて閉鎖し、その上にも弩を据えた。特に下流のマダーイン Madā'in バスラ Baṣrah 方面に對してはブーカー・ティームールが一トゥマン(一萬)の軍勢を率いて警戒に當つた。

元史(巻一四九)郭侃傳によれば

從二宗王旭烈兀一西征。……兩城間有二大河一。侃預造二浮梁一以防二其遁一。城破。哈里法算灘(ハリーファスルターン)登レ舟、覩下河有二浮梁一扼ち之。乃自縛詣二軍門一降。其將紂答兒遁去。侃追レ之。至レ暮諸軍欲二頓舍一。侃不レ聽。又行十餘里乃止。夜暴雨。先所レ欲一舍處、水深數尺。明日獲二紂答兒一斬レ之。

とあつてカリフ・ムスタアスィムはティグリス河を舟で逃れようとは思つたが、舟橋で扼されているのを見てやめて、

自ら降り、紂答兒、卽ちDawātdārは逃亡したが郭侃等が追擊して捕え殺したとある。

また常德の西使記には、同じくバグダード攻略の所で

合里法以レ舷走獲焉。

と記してある。ペルシャの史家ミンハージ・スィラージュMinhāj-i-Sirāj のṬabaqāt-i-Nāṣirīによれば、(一〇二)ダワートダールはカリフに說き、財寶と共に小舟に乘り、河上をバスラに逃れ、エウフラテス、ティグリスのデルタの島々にかくれて危險の過ぎるのを待つように勸めた。しかるにワジールは、それは得策でない。自分が今蒙古軍と和を議しつゝあるからと言つて思い止まらせたとある。(一〇三)ラシードッ・ディーンはカリフの脫走計畫に就いては何等言及することなく、ただダワートダールのみはスィーブSībの町に逃れようとして、舟でティグリスを下つたが、カルヤットル・ウカーブQaryat al-'Uqāb（鷲の村）の先で、蒙古兵のため投石・弓矢・石油壺などの攻擊をうけ、舟三隻とその乘組員全部を失い、自身はバグダードに引返したと傳えている。(一〇四)

これによつて元史郭侃傳の方は大體、ペルシャ史家の所傳と一致するが、西使記の方に、カリフ自身、舸によつて走つた如くあるのは、恐らく紂答兒（ダワートダール）との混同と見られるのである。

二月五日にバグダードが蒙古軍によつて死命を制せられてから、同十三日に大虐殺が始まるまでの八日間は、この富みかつ美しい獲物を前に悠々と城外に長嘯するフラグ軍と、黃金宮裡に狼狽爲す所を知らぬ哀れなカリフ一門との間に種々の交涉の行われた期間であつた。

この間の經緯はペルシャ史家の所說にも異同があつて、果してフラグの眞意がどこにあつたか推察に苦しむのである

が、二月七日にはカリフ側の強硬派の中心たるスライマーン・シャーとダワートダール・アイバクの引渡しを要求した。アブール・フィダーによれば、フラグはカリフ自身に對しては寧ろ好意を示し、その女をカリフの第二子アブー・バクル Abū Bakr（または Abū Fazl Abd-ar-Raḥmān）に嫁せしめたいとの意向さえも漏らしたとある。（一〇五）またスライマーン・シャーやダワートダールの一族、家來どもをも連れて來さしたが、これらは蒙古軍の將士にわかち與えて、シリヤ、エジプト方面の遠征に使役する豫定であつた。

かかる際にフラグの寵臣でビチクチの役をつとめるヒンドゥ Hindu が眼を射られると云う事件が突發したため、フラグの心情は俄に硬化した。翌八日にはダワートダール・アイバクを殺し、また昂然として屈しないスライマーン・シャーとその家眷約七百名をも鏖殺するに至つた。大ダワートダールの子アミール・ハージュッ・ディーン Amīr Hāj ad-dīn も同じ運命に遭つた。

十日にはカリフはその三子と、貴族、イマーム、裁判官、その他高官達三千人ほどとともにフラグの陣營に投降した。するとフラグはカリフの健康を問い、バグダードの市民に皆武器を捨てることを命ぜよと促した。平和漸く來たると安心したカリフらが、その通りに實行すると、十三日には蒙古兵は八方より市中に亂入し、掠奪虐殺を逞しくした。最も凶暴を極めたのはジェオルジァ兵で、イスラム教徒と見れば假借なく凶刃をふるい、若干のキリスト教徒や外國人などが僅に免れ得たのみであつたという。

この間、カリフはカルワーザー門外に設けられた特別のテントに收容され、蒙古兵に護衛されていたのであるが、十五日にはフラグは初めて入城し、テイグリス河畔なるカリフの宮殿を訪れて、ムスタアスィムを呼び寄せ「御身はこの

宮殿の主人にて、我は客である。御身は果して何を我に贈るつもりでいらるるや」と云つた、カリフは戰慄し、寶藏の錠を破り、二千領の裝束、一萬ディーナールの黄金、若干の寶石類を取出して差出したがフラグは受けようともせず「かく明白に所在の知れているものを差出す必要はなし。匿れた寶庫を開かれよ」と云つた。ここに至ってカリフはとある場所を指して掘らしめたところ、地下から一塊百ミスカールもある金塊を滿した櫃が現われた。(一〇六)

部將スーンジャークはカリフの財寶を調査する役目を命ぜられた。そして、これらを城外のフラグの本陣に運ばしめたが黄金珠玉は積んで山をなし、またカリフの厨房から運び出された金銀の容器類など蒙古兵により鉛の如く無雜作に取扱われた。(一〇七)

ワッサーフの書によれば、蒙古兵らが獲得した「金錢」、「豪華な織物」、「ギリシャ、エジプト、シナなどの産物」、「アラビヤ馬」、「騾馬」、「ギリシャ系、アラン系、キプチャック系の僮僕」、「トルコ系、シナ系、ベルベル系の奴隷女」などは全く數え切れぬ夥しさであつたとあり、またミンハージ・スィラージュによれば、鹵獲品があまりに多かつたので、ジェオルジァ兵やタタール兵は金銀、寶石、眞珠、貴重な織物類、金銀の容器類の重さにうちひしがれた。またシナやその他の地の陶磁器や、銅や鐵の細工品類に至つては殆ど無價値のものとして扱われ、打ち壞し、投げ棄てられた。兵士等は馬や騾馬の鞍、その他極めて普通の用具にまで寶石、眞珠、黄金などをちりばめた。中には劍を柄の所で折り去つて鞘に黄金をつめ込む者もあれば、市民の屍體の臓腑を取り去り、その代りに黄金、寶石、眞珠などを積めて運び去る者どももあつたという。(一〇八)

西使記にも、バグダードの富を說いて

其國俗富庶。爲二西域冠一。宮殿皆以二沈檀・烏木・降眞一爲レ之。壁皆以二黑白玉一爲レ之。金珠珍貝不レ可レ勝レ計。其妃后皆漢人。所レ產大珠曰二太歲强（または彈）一。蘭石・瑟瑟・金剛鑽之類。帶有下直二千金一者上。

といい、また元史郭侃傳にも、バグダード滅亡の時のことを傳えて

東城殿宇皆搆以二沈檀木一。擧レ火焚レ之、香聞二百里一。得二七十二絃琵琶・五尺珊瑚燈檠一。

としている。

アッバース朝五百年を通じ、アラブ、ペルシャ系の商人は、西は東アフリカ沿岸地方から東はシナの諸港にかけて縱横に活躍し、各地の富を無量に運んだのであるが、それらの最も多く集り蓄えられたのは勿論バグダードであつた。されば、その滅亡に關するペルシャやシナの史料に、香木、珊瑚、眞珠等の南方の珍寶を初め、インドやシナの產物などがあげてあるものも少しも意外ではない。また當時の貿易には、人間の賣買が重要な部門をなしていた事も周知の事實である。西使記にカリフの「妃后は皆漢人」などとあるのは、誇張とする外はあるまいが、漢土の奴隷女が相當多數居たことは前述のごとくペルシャ史家も傳えているところである。

フラグがカリフの後宮にある人數を調査せしめたところ、妃嬪七百人、宦者一千二百人であつた。(一〇九) その中に前述の如き漢族の子女も交つていた事であろう。フラグはカリフの懇請により、右のうち百人だけをそのもとに殘すことを許したところ、ムスタアスィムは血緣のものどもを選んで連れ去ったとある。(一一〇) 殘つたものは前掲のワッサーフの所傳の如く蒙古軍將士の捕える所となつたのであろう。

バグダード城內の無秩序狀態は七日間續き、(一一一) 盛に放火、掠奪、虐殺が行われていた。特にイスラム教の禮拜堂は大多

數が燒き拂われ、カリフの禮拜堂、ムーサー・アル・カーズィム Mūsā al-Kaẓim の廟所、ルサーファにある歷代のカリフたちの墓所なども大部分の市街、邸宅とともに炎上した。(一一三)

かかる大劫掠の間に屠殺された市民の數は夥しかつた。一說によれば蒙古軍は一度び城內に亂入するや、隊ごとに擔當區域をきめて荒らしまわつた。その橫行は、或は三十四日間、或は四十日間も續いたとの說がある程である。ラシードッ・ディーンによれば市民中八十萬人が命を失ったとあり、イブン・ハルドゥーンは二百萬人中百六十萬人が殺されたとし、西紀一三四八年に歿したエジプトの史家アッ・ザハビー Shams ad-dīn adh-Dhahabī によれば百八十萬人以上が犧牲になつたと言い、マクリーズィー Taqi ad-dīn al-Maqrīzī (1364—1442 A. D.) は二百萬人が鏖殺されたと傳えている。(一一四)

この間にあつて僅に手ごろを加えられたのはキリスト教徒であつた。これらはネストル派の司祭によつて、とある教會にかくまわれた。ミンハージ・スィラージュの所傳によれば、バグダードのキリスト教徒はすでに、フラグと連絡があつたとしてある。またアブール・ファラジュ Yuḥannā Abū'l-Faraj Barhebraeus (1226—1289) の史書 (Kitāb Mukhtaṣar ad-duwal) によれば、イスラム教徒中、富裕な人々は、ネストル派キリスト教徒の司祭に厚幣を贈り、その庇護によつて命を全うしようと努めたけれども、結局悉く滅び去つたとある。(一一五)

ただし、イスラム教徒でも、シーア派の人々には運命を別にしたものが多かつたらしい。それは彼等の中には、蒙古軍に內應したものが少くなかつたという事實からも窺えるのである。

イブン・タグリビルディー Ibn Taghribirdī の史書によれば、フラグに協力してバグダードを攻めたモスル (Mauṣil)

の軍の主將サーリフ Sālih の下には、バグダード西部のカルフ區のシーア教徒も居つたといい、(一一六) また Le Strange 氏の說によるも、フラグ軍が外から猛攻を加えた際、バグダード城內からも內應したものがあつたとしてある。それはカルフ區のシーア教徒と、カーズィマイン Kāẓimayn のイマーム・ムーサー Imām Mūsā 廟附近（カルフ區がもとの圓城の南方にあつたのに對し、カーズィマインはその北方にあつた）に住んでいた同じシーア教徒であつたという。(一一七)

バグダードの大虐殺に乘じ、イスラム教徒間でも、從來の反目から相殺傷した者も多數あつたらしいことは、右の如き事實からも窺えるのである。

西使記にはバグダードのことを述べて「人物頗る諸國よりも秀でたり」とあるが、この地が當時の西アジヤに於ける文化の大中心として、學者・文人・美術家等の淵叢であつたことは言うまでもない。今、これらが殆ど擧げて殺戮されるとともに、五百年間の蓄積とも言うを得べき貴書珍籍、宮殿、圖書館、學校、病院、邸宅等の多數が炎上したのであるから、イスラム文化、西アジヤ文化にとつては到底償い得ぬ大災厄であつた。これまでにも、この地が兵亂の巷となつたことは何回もあつたけれども、今回の如き徹底的の大破壞が行われたことはなかつた。從來のは大抵、同じイスラム教徒間の爭いで、破壞にも餘程手心があつたと見てよいであろう。しかるに今回は、殆ど西亞文化に理解のない東北アジヤ遊牧諸族を主力とする軍の容赦のない破壞であつたのである。

エドワード・ブラウン Edward G. Browne は、名著「ペルシャ文學史」中で、この際「イスラム學術の蒙つた損失は到底筆舌に盡せるものではなく、殆ど人間の想像の域を越し、しかも二度とふたたび、もとの水準には達し得なかつた。無限の價値のある典籍が數千數萬となく永遠に滅び去つたのみでなく、多數の學者が或は命を失い、或は僅に身

を以って逃れるというようなことのため、精密な學術研究の傳統、獨創的の探究等、從來アラビヤ學藝界に拔群の位置を占めて居たものが、殆ど擧げて破壞し去られたのであつた。かくの如く偉大壯麗だつた文明が、かくも速かに火によつて燒き盡され、血にてかき消されたことは、恐らくは未だ曾つて他には無かつた事であろう。」と痛歎している。〔二一八〕

またこの事件より四十四年後、フラグの曾孫ガーザーン汗の治世下に、その史書を書き上げたイブヌッ・ティクタカーは「スルターン、（フラグ）の軍勢は大擧して市中に殺到した。殺傷、掠奪はバグダードに充滿した。この都の不幸は簡略に語つても人の心魂を寒からしめる。詳細に語つたら、どう思われることであろう。その大悲劇を私は口にしたいとは思わない。讀者よ、隨意に想像されよ。しいて問いただし給うことなかれ」と言つている。〔二一九〕

この故にイスラム文化史を研究するものは、蒙古軍の來襲によつて起つたこの一大事變を深く考慮に入れなければ、今後の諸現象の眞相を把握し得ないであろう。このことは、ひいて東亞の歷史にも相當に深い關係を持つものと、私は考えている。何故ならば、中世に於けるインド洋を中心とする東西貿易には、イスラム教徒が樞軸となつていたからであり、イスラム文化の中心にかかる大變動の生じたことは、ひいて東亞に於ける同教徒の活動にも影響を及ぼさずにはいられなかつたと考えるからである。

九　カリフ、ムスタァスィムの最期

カリフ、ムスタァスィムの運命はどうなつたかというと、バグダード滿城の死屍の腐臭に僻易して、近郊の村落に本營を移したフラグのもとに拉致され、遂に二月二十日（一說にほ翌二十一日）にワクフ Waqf 村で、その長子および

五名の宦官と共に死刑に處せられたといわれている。[一二〇] この事件はイスラム教徒間に非常な尊敬を受けつゝあつた神聖なカリフが、異教徒(カーフィル)によつて慘殺されたと云う異常なものであり、五百年の傳統を持つアッバース朝の中絶でもあつて、イスラム社會にあたえた衝動ほ甚大であつた。ムスタァスィムの最期の有樣についても諸說紛紛として一致せず、その間に多くの傳說的分子を釀し出している。またこれについてはリ・ストレンジ教授の研究を始め、種々の文獻が現われている。[一二一]

カリフ、ムスタァスィムの處置についてはフラグ汗の側近にあつたイスラム教徒達も、アッバース朝に對して反感を抱いていたシーア派教徒の一部を除けば、なお多分にカリフの傳統に對する尊敬心を持つていて、若しこれに危害を加えるようなことがあれば諸々の天變地異が起ると云うものもあり、また事實そう信じていたものも多かつたに違いない。故に、フラグも內心は、何も好んでそのような危險に觸れたくはなかつたのだと云われている。しかし、蒙古軍に味方したシーア派教徒中に「若しカリフにして存生せんか、蒙古軍中のイスラム教徒や、他の國々の同教徒はいつか蹶起してカリフを奉じ、フラグ汗を無事には置くまい」と說いて勇斷を迫る人々があつたとはミンハージ・スィラージュの傳えた所であり、ワッサーフも、フラグはカリフが生存したならば、豫言者マホメットの後繼者(ハリーファ)、イスラムの教首(イマーム)たるの威望をもつて、强大な武力を盛返えすに至りはしまいかと危懼したと云つている。[一二二] そして遂にナスィールッ・ディーンの如き學者の意見に力づけられ、カリフの命を斷つ決意をしたのである。

ラシードッ・ディーンによれば、ムスタアスィムはいよいよ死を免れ得ぬと知るや、みそぎさせてくれと求めた。そして

「朝は天堂に似し家に住み、夕は居るべき家もなし」の句で始まる詩の數節を誦した後、二月廿日、長子及び五人の宦官と共にワクフ村で殺されたとあるが、處刑の方法については明言していない。[一二三] カートルメールは、これに就き祕密裡に行われたものであろうという意見を述べている。[一二四]

イブヌッ・ティクタカーは、スルターン（フラグ）はカリフにその妻や子等とともに來よと命じた。そしてカリフが現れるや、人々はその放縱さ、優柔さを痛烈に面罵した後、その長子及び次子と共にヤーサー（ヤサック）の刑律に照して處分し、その娘達を捕虜にしたとのべている。[一二五]

ジェオルジアの年代記によれば、フラグの面前に曳き出されたカリフは「跪け」と命ぜられた。しかし彼は拒んで膝を屈せず「我は獨立の君主にて、何者にも臣屬せぬ。我を自由にしてくれるならば御身に從がおう。でない限り、我は他の奴隷となるよりは死を選ぼう」と云つた。そこで人々は彼の足をすくつて俯伏せしめた。それでもなお强情な態度をとつていたので、フラグはクーカー・イールカー（郭侃）に命じ、カリフとその子等を外にひき出して殺さしめた。また郭侃はカリフを殺そうとするにあたり「汗は御身に慈悲をかけたもうぞ」と云つた。「では、バグダードをわれに還そうと云われるのか」「いな、汗自ら御身を成敗し、汗の御子アバイガーをして御身の一族の人々を介錯せしめるであろう」「結局殺されるならば、われに手を下すものが人であろうと、狗であろうと大差のないことである」と云つたとも傳えられているが、[一二六] 多分に說話的で、どこまで信じ得るものか、甚だ疑問である。

ワッサーフとヌワイリーは、蒙古人はカリフを絨毯の中に卷き、その上を騎馬で蹂躙し、血が流れぬように殺したと云い、ヌワイリーは、それは成吉思汗のヤーサーに、王族の血を流してはならぬとあるのに從つた爲であつたと斷つて

いる。[一二七]

カリフ處刑の光景を目擊したと傳えられる Vasag の子ハサン Haṣan の物語つた所によれば、フラグは自ら劍をとつてカリフを斬り、己れの子をしてカリフの子を斬らしめ、もう一人のカリフの子はティグリス河に投ぜしめたというのである。[一二八]

かくの如くカリフ・ムスタァスィムの最期については諸說があつて、その眞相を知り得なかつたし、その事柄が頗る人の心を衝くものであつたから、色々の傳說的物語の發生を促したのである。カリフの歿後十四年目に西アジアを通つたマルコ・ポーロは、親しくバグダードを訪れたのではないようであるが、カリフの死についての傳說の一例を傳えている。

「その上バウダックのカリフのもとには、人々が曾つて有していた最大の黃金と金と銀の財寶が見出される。……ウラウ（フラグ）と云ふ名前のタルタル人の君が……それ（バウダック）を奪つた時に、彼はカリフのもとに金と銀と寶石と莫大な値ひの他の財寶の充ちた塔を見出した。……彼はこの大なる財寶を見た時、彼は非常にそれに驚いた。……そしてカリフをよびにやりそして彼の前に連れて來させた。それから彼は彼に次のやうに云つた。カリフよ、汝は何故かくも多くの財寶を集めたのであるか、われに語れ。汝はそれをどうするつもりか。汝はわれが汝の敵であり且つ非常に多くの軍勢を率ゐて汝を位から逐ふために汝を襲ふことを知らなかつたのか。汝がそれを知つてゐるならば、何故汝は汝の財寶を以て騎士たちと傭兵たちに與へ汝と汝の人民と汝の都を守ることのためになさなかつたのか。カリフは驚き且つ懼れて彼に何も答へなかつた。何となれば彼はどうすべきかを知らなかつたから。そしてそれからウラウは彼に

云つた。カリフよ、汝は語らない。そして汝は財寶を愛してゐることを知つたから汝の考へが如何なるものであつたかを汝に示し、且つ汝の非常に愛してゐるこの財寶を喰べるために汝自身それを取れ。それから彼はカリフを連れ去らしめ、そして彼を財寶の塔に入れ、そして飲むものも喰べるものも與へないやうに命じた。そしてそれから彼は彼に云つた。カリフよ、財寶は汝を非常に喜ばせるのであるから、汝の欲するだけそれを喰べよ、いま汝はこの財寶以外に喰べるものは何も與へられないのである。それから彼は塔の中にとり殘され、そしてその時には自分の過ちを知つたが時既に遲くそして彼の財寶は生きるためには何の役にも立たなくて、四日目の終りに奴隷の如く飢えて死んでしまつた。そしてそれ故にカリフにとつては、彼の人民と共にそして位を奪はれて死ぬよりは、彼と彼の國土と彼の人民を守るために彼の財寶を戰士たちに分ち與へた方がよかつたに違ひない」(一二九)

ペルシャの史家ニクビー Nikbī とミールフワーンド Mīrkhwānd らも、右のものとよく合致する傳說を記している。卽ち、カリフがその財寶を提出すると、フラグは金貨を盛つた皿をその面前に置いて食えと命じた。「黃金を食べることは出來ない」と答えると「では何故、御身はそれを軍隊に與えずに死藏していたのか。何故にこれらの鐵門を鏃に鑄直してジーフーン（アム河）にいで向い、我等を防ぎとめなかつたか」となじつた。カリフが、すべてはアルラーの思召しであると云うと「では今御身に起らんとすることもまた神の思召しであるぞ」と云つたとある。(一三〇)

右と同系統の說話はアルメニヤのハイトン Hayton, 佛のジョアンヴィル Joinville, ギリシャ史家パキュメレス Pachymeres その他によつて傳えられ、(一三一) 更に十四世紀後半にカイロに住んだアラブ史家イブヌル・フラート Muḥammad b. ʻAbdarraḥīm b. ʻAlī b. al-Furāt Nāṣiraddīn al-Miṣrī al-Ḥanafī (1334－1405) の著書にも、フラグは命

じて食物を與えないでおいたので、カリフは大に飢え苦しみ、何か食物を與えよと求めた。邪惡なフラグはこれに一皿の黃金、一皿の白銀、及び一皿の寶石を與えしめて「これらを食べよ」と命じた。カリフがかかるものは食物にはならぬというや、フラグは「食物に適せぬことを知りながら何故にこれを死藏したか。この一部を前もつて我等に贈つて感情を和らげ、また一部を以て兵を募り、我等を拒ぐべきであつたぞ」と云い、命じてカリフとその子とを營外に連れ行かしめ、それぞれ袋に入れ、その上から踏み殺さしめたとある。(一三二)

ロングフェローが Tales of a wayside Inn 中に入れた Kambalu の詩は、明かにこの種の說話に取材したものであり、マルコ・ポーロの書に示唆を得たという通說は當つていると思われる。

カリフ・ムスタァスィムの死の眞相は要するに明確には知り難い。またバグダードの文化の特徵、その滅亡の意義などを考えようとしている本論に、特にその人の最期の事情などを詳細に穿鑿する必要は無いようである。しかしながら、このカリフの死を繞つて發生した諸傳說中にまでも、その宮廷の莫大な財寶のことが出てくるのは、よしアッバース朝の政治的實力は衰微の極にあつたとするも、なおその都には驚異的の富が蓄積されていたことの一證とするに足ると思われるのである。

元史郭侃傳や西使記中にもこの事實を傍證する記載があるようである。前者に、東城の殿宇はみな沈檀木を以つてつくり、火を擧げて焚くに香百里に聞こえたとか、五尺の珊瑚の燈檠を得たなどとあり、西使記に、その國俗富庶、西域に冠たり。宮殿は皆沈檀、烏木、降眞を以つてつくり、壁は皆黑白玉にてくつる。金珠珍貝は計うるに勝えず云々などと記してあるなどがそれである。

西純一一五四年に東城のタージュ宮 Qaṣr-at-Tāj が炎上したときは、九日間も燃え續けたと言う記録がある。その宏壯さが想像されるが、しかもタージュ宮は多數の王宮中の一つに過ぎなかつたのである。

ムスタァスィムの人柄については前文でも觸れたのであるが、西使記には「合里法は酒を悅ばず、橙漿を以て糖に和して飲と爲す。琵琶は三十六弦。初め合里法頭痛を患い、醫も治する能わず。一伶人新琵琶を作る七十二弦なり。之を聽くに立どころに解く」と記されてある。酒（ハムル）は元來コーランによつてイスラム教徒には禁ぜられたものであるが、(一三四)實際はこの戒律を破るものが少くなかつた。萬人の儀表たるべき歷代のカリフ達の中にも、酒の愛飲家がしばしば現われている。アッバース朝ではアル・ハーディー al-Hādī (785—786) アル・アミーン al-Amīn (809—813) アル・ムウタスィム al-Muʻtaṣim (833—842) アル・ワーシク al-Wāthiq (842—847) アル・ムタワッキル al-Mutawakkil (847—861) 等は愛酒家として知られた。またハールーヌル・ラシード Hārūnu'r-Rashīd (786—809) やアル・マームーン al-Ma'mūn (813—833) はハムルは飲まなかつたが、アルコール分の少ないナビーズ nabīdh を飲用したと云われている。(一三五)これらに對しアル・マンスール al-Manṣūr (754—775) やアル・ムフタディー al-Muhtadī (869—870) 等は飲酒に反對したことを以て知られているのである。(一三六)

カリフ・ムスタァスィムに就いては、イブヌッ・テイクタカーの書にその敬虔な人物であつた事は傳えているが、別に禁酒黨であつたかどうかを示す記録はない。偶然かかる中國の史料がその遺漏を補つていることは興味深い事實である。そして、その愛用したのは橙漿を砂糖に和して作つたものであるとしているが、これは中世のイスラム社會に普及していたシャーベット（シャラーバート）を意味するものと思われる。この飲物は東亞では舍利別、舍里八などの名

で、西歐では sherbet（英）Scherbett（獨）sorbet（佛）等の形で傳わつている。アラビヤ語で「飲む」と云う意味の動詞 sharibaから來た sharābāt が原形と思われる。(一三七) 製法は、西記使には橙漿とあるが、實際は廣く柑橘類・葡萄・桑の實・柘榴その他の果汁を用い、砂糖を混じ、薔薇水・龍涎香・サフラン・麝香などで芳香をつけ、氷または雪などで清涼にした飲物である。その調製法にも樣々の差異があつて、ひとり日常の嗜好品であつたのみでなく、また藥用にもあてられた。そして、これが調製・販賣にあたつたのは主にキリスト教徒だつた如くである。その起源はサーサーン朝下のペルシャ人社會にあるのではないかと想像されるが明かでない。酒の飲用の禁ぜられたイスラム社會で、相當長い間飲物中の王座に居つたことは、アラビヤ語「シャラーバート」が本來は「飲物」の意味であることでもわかる。そして十五世紀以後コーヒーの普及されるに至つて、その全盛期を終つたものと考えられる。元の至順鎮江志（卷七）によれば成吉思汗が西征したときサマルカンドで、その第四子トゥルイ（也可那延）が病んだ。そのとき、その地の醫師撒必は「舍里八」をすすめ、馬里哈昔牙の徒衆は祈禱をし、病は始めて癒えた。(一三八) そこで撒必を

充三御位舍里八赤、本處也里可溫答剌罕一

とある。舍里八赤とは勿論 sharābāt-čī で、蒙古語で「何々を扱う者」の義の čī がついた形であるから、蒙古王室のためにシャラーバートを調製する係官の義であろう。そしてこの一族がネストル派の基督教徒であつたことも「本處也里可溫答剌罕」に充てられたことでわかる。至順鎮江志の同じ條には、後に鎮江路の副達魯花赤になつた薛里吉思(Sargis)の一族がもと薛迷思賢（Semiskent, Samarqand）の王家の侍醫をつとめていたキリスト教徒であつたことを述べて

公（薛里吉思）之大父可里吉思（Georgis）・父滅里・外祖撒必爲二大醫一。

としてある。撒必は薛里吉思の母方の祖父に當るのである。そう云う緣で世祖忽必烈のとき、薛里吉思を呼び寄せて、シャーベットを調製させた。鎭江志に

至元五年（一二六八）世祖皇帝、召レ公。馳驛進、入二舍里八一。賞賚甚侈。舍里八煎二諸香果泉一調レ蜜和而成。舍里八赤職名也。公世精二其法一。旦有レ驗。特降二金牌一以專レ職。九年同二賽典赤平章一往二雲南一。十二年往二閩浙一。皆爲レ造二舍里八一。

とある。平章賽典赤 Sayyid Ajall が矢張りトランスオクシアナの人で、ブハーラー出身のイスラム教徒であつたことはよく知られている。（一三八）後に雲南に赴任し、その一族はかの地で繁榮し、雲南回教徒の中心となつたのである。

世祖が薛里吉思をわざわざサマルカンドから呼び迎えたというのも、一にはその父トゥルイと薛里吉思一族との舊緣故に據つたものかとも思われるのであるが、もう一つの理由として恐らく賽典赤等の如き中央アジヤ出身者の推薦もあつたのではないかと私には考えられる。

更に至順鎭江志によるに薛里吉思は至元十四年には鎭江府路總管府副達魯花赤を命ぜられ、一面その地方にキリスト教を弘めるに努力したのである。夾道巷の大興國寺もその建てた教會の一つであつた。またその子孫には「舍利八は世業なり。謹んで廢すべからず」と訓戒し、その製法の保存に努めたとある。

右の如き資料に據るもシャーベットの調製は醫業と密接な關係があつて、醫家の祕傳として、それぞれの家法があつたことがわかる。中世の西アジヤ社會では、このものは嗜好品として、また醫療品として日常愛用されていたが、その狀態は千夜一夜物語などからも多くの資料を蒐めて描寫することが出來るのである。（一四〇）

次に元史郭侃傳には、バグダード陥落の際、カリフの宮殿で獲た寶物中、特に「七十二弦の琵琶」を擧げている。西使記によるに、初めカリフは頭痛を患い、醫も治することが出來なかつたが、一伶人が新琵琶の七十二弦なるを作り、これを聽くに立どころに解けたとしてある。

カリフ・ムスタァスィムが音樂を好み、それを聽いたり、道化役の藝を眺めたりして時の大部分を過していたとはイブヌッ・ティクタカーも傳えた所である。(一四一) その位であつたから音樂の名手達もその下に集つた如くで、アラビヤ音樂史上最も偉大な樂人の一人とされるサフィーッ・ディーン・アブドゥル・ムウミン・アル・バグダーディー Ṣafī ad-dīn Abd-al-Mu'min b. Fāḫir al-Urmawī al-Baghdādī の如きも、このカリフの治世の末期に寵遇を受け、その伶人頭であつたとされている。(一四二)

ただ七十二弦の琵琶とは如何なるものであつたか、これについてはアラビヤ、ペルシャの文献に別に記録がないようであつて、右に擧げた元史や西使記のものが、唯一のものと認めてもよいであろう。西使記に一伶人とあるのも、或はサフィーッ・ディーンのことかも知れないが、別にこれという傍證も無いのである。ファーマー氏のアラビヤ音樂史によるに、普通アラビヤ樂器中四弦又は五弦のウード ʿud を琵琶 lute と譯すが、右の場合のはジュンク (junk) 卽ちハープ (竪琴) であろうという。(別にアラビヤ語で ṣanj という。これはペルシャ語 chang の變化といわれる) またこのジュンクの構造について同氏は「その特徴は十四世紀に至るまでのものは不明である。但し十三世紀の中ごろバグダードのカリフの宮廷で三十六弦乃至七十二弦のものが使用された記録がある」と言つている。(一四三) この記録とは Bretschneider 氏の紹介した西使記の一說を指しているのであつて、(一四四) 他に別に資料があるわけではない。換言すれば、西使

記はアラビヤ樂器ジュンクの構造に關する最古の記録なのである。岸邊成雄氏の說に據るに、竪型ハープは元來サーサーン朝ペルシャの代表的樂器の一つでアラビヤに入つてジュンクなる名の下に行われているが、大して重要視されていない。それはこのものの構造が纖細精巧で、貴族的な樂器であるから、貴族的色彩の强いペルシャ音樂では最近までこれを重要視しているが、これに反してアラビヤでこれを棄て去つたのは、その音樂が寧ろ庶民的であることを物語るとも解釋出來るとある。(一四五)

アッバース朝の宮廷に於いて、音樂を保護して立派な藝術的境地まで高めたのはハールーヌル・ラシードであつたと言われているが、(一四六)その音樂の要素は純アラビヤ風の性質の勝つたものよりも、寧ろサーサーン朝ペルシャの宮廷音樂などを多分に繼承したペルシャ的要素の强いものではなかつたろうかとは、この西使記の一節などからも類推したくなることである。單に音樂のみならず、アッバース朝の宮廷、制度、文化等に濃厚なペルシャ的色彩があることは容易に看取出來る事である。

カリフ・ムスタァスィムがこの新考案のハープによつて宿痾の頭痛を癒したと云う事實はアラビヤ語ペルシャ語の史料には見えないことであるが、西紀十世紀の中葉にバスラに起つた哲學の一派イフワーヌッ・サファー Ikhwānu's-Ṣafā' の徒の論著中には、音樂が人體に與える影響を論じた後に「その故に音樂は疾病の苦痛を和げるため、各地の病院で醫療に應用されている」とあり、(一四七)また千夜一夜物語にも「ある人々にとつては、音樂は肉であり、また他の人々にとつては醫藥である」(一四八)との一節がある如く、中世のイスラム社會では音樂はひと通りの藝術や娛樂ではなくて、それ以上の靈性があるものとされていた。西使記の右の一節も、そういう點を示すものとして見るとき、特に興味の深いことを感ず

るのである。

一〇　結　語

カリフは死に、市民の大多数も死に絶えた焼土のバグダードに、フラグはクーカー・イールカー（郭侃）とカラ・ブーカーに三千騎を授けて進駐させ、治安の回復と維持、死屍の片附けなどを行わしめた。また攻城の際一番乗りの殊勲者アリー・バハドゥールを市尹とし、カリフの下に宰相であつたムアイヤッドッ・ディーンを依然としてその職に留まらせ、ファハルッ・ディーン・ダームガーニー Fakhru'd-dīn Dāmghānī をカリフの下でそうであった如く、行政長官 ṣāḥib dīwān に、ニザームッ・ディーン・アブドゥル・ムーミン Niẓāmu'd-dīn Abd al-Mu'min Bandinjain を大法官 qāḍī'l-quḍā に任じた。(一四九)

かかる大災厄後の、人煙も乏しい市中に、僅に虐殺を免れ得た市民達は、カリフの死後、初めての金曜日を禮堂に集まり、聖地メッカに向い禮拜を行つた。その際にイマーム（導師）は薄幸のカリフの冥福を祈つた後、「死によりて高貴なる存在を破却し、この地の住民を罰し、これを絶滅し給いしアッラーよ、稱えられてあれかし」という言葉を挿み、その結尾に「アッラーよ、我等の蒙りし災厄に對し力をあたえ給え。イスラームの教とその子等とは、いまだかつてこれほどの大厄を受けしことはなかりしぞ。さりながら我等はアッラーに從い、アッラーに歸依し奉る」と唱えたと傳えられている。(一五〇)

こうしてバグダードは無數の死屍と、見渡す限りの灰燼の中から復活し始めたのである。その蘇生の第一聲は大慈大

悲のアルラーに對する讃辭であつた。しかし、こうして復活したバグダードは兵火にかかる以前のものの再現ではなかつた。同じ場所に芽生えはしたけれども、到底昔の面影を偲ばすような巨樹に成長することは出來なかつたのである。西紀一三〇〇年、卽ち事變後四十餘年して書かれたアラビヤ語の地理書「マラースィド」(一五一)中に戰後のバグダードの景觀を述べて「韃靼人のために市街はあげて荒廢に至らしめられ、その住民は總て殺されたので、昔日の繁華を偲ぶことの出來る者は一人として殘つていない。かくもその市民達が死に盡したのを見て、地方から出て來た人々が代つて住むようになつた。されば、この町は昔とは別のもので、その住民も全然變り果てたものである」と言つている。ただしマルコ・ポーロは「バウダックは非常に大きい都會である。……そしてそれは巡回するのに三日かかる程大きい。そして都の中央を貫いて、非常に大きい河が通つてゐる。そしてその河によつて人々はインディーの海に行くことが出來、そしてそこにはたえず非常に多くの商人が多くの商品を携へて往來してゐる。……そして更にバウダックで彼等はすべての知識そして特にマホメットの律法とそして魔法、物理、天文、卜地、そして骨相及び哲學を非常に研究する。そしてそれはこれらのすべての部分に於て見出される最も立派で且つ最も大きい都である」などと言つているが、(一五二)これは恐らく「……であつた」と云う風にそのかみの有樣を傳聞によつてのべたもので、ポーロ自身がその地を訪れなかつたことはその行程から見て明かである。彼が西アジアを通つたころのバグダードは實は荒凉たる廢墟で、そして僅に復興の緒についた姿であつた筈である。ラシードッ・ディーンはフラグは此の町を將來使用する積りであつたから徹底的には壞滅せしめなかつたと言つているが、(一五三)これほどに破壞の猛威をふるつて置いて、もし眞にラシードッ・ディーンの言つた如くなお手加減があつたものとするならば、蒙古軍の殘忍さは殆ど想像を絕する程度のもと言わねばなるまい。しかし、

ラシードッ・ディーンの所傳も一概に否定することは出來ない。一度び戰火が去ると、モンゴル軍は、ある程度復興に力をつくしたものの如くである。そしてイル汗國時代には、そのイラーク・アラビー地方の首府とされて一三四〇年ころに及んだ。

一三二七年にはモロッコの旅行家イブン・バットゥータがここを訪れ、斷垣廢礎の間を彷徨して、衰微したその有樣を傳えている。彼によれば、バグダードの西部（jānib al-gharbī）の大部分は荒廢している。しかし、なお十三の市區が殘つていて、それぞれ獨立した市街の觀を呈し、各々に二三ヶ所の浴場 ḥammām がある。そのうち八市區には各、大禮拜堂があるとしてある。東部市街 jānib ash-sharqi には市場が多く、壯觀を呈している。その內最大のものは「火曜日の市」Sūq ath-*th*alāthā' と呼ばれるもので、商人は商賣ごとに區劃を異にして店舗をつらねている。この市場の眞中にニザーム學園 al-Madrasat al-Niẓāmīyah があり、その壯麗さはものの譬えにされている程である。市場の出外れにあるムスタンスィル學園 al-Madrasat al-Mustanṣirīyah では法學の四大派を教授しているが、各派とも獨立した建物を持ち、各、別の禮拜堂や議義室がある。また東部市街には大禮拜堂三ヶ所があり、その一つは「カリフのモスク」Jāmi'u al-*k*halīfah と呼ばれ、もとカリフの宮殿だつた所に近くあるとしている。(一五四) カリフのモスクはフラグの兵によつて燒かれたと記錄にある所から見て、その後に復興されたものと思われるのである。

イブン・バットウータと同時代のペルシャの學者ムスタウフィー Mustawfī ことハムダルラー Ḥamd-Allah はその地理書「心のよろこび」Nuzhatu'l-Qulūb（西紀一三三九年に完成）中でバグダードの有樣をえがき、東部も西部も城壁で圍まれ、東城は周圍一萬八千歩（ペース）で四門があり、西部の中心はカルフ Ka*r*kh で、一萬二千歩（ペース）の半圓形の城壁に二

門があると云つている。(一五五)

近代に入つてから、バグダードの姿を略圖までそえて傳えたのはフランスの寶石商人タヴェルニエー J. B. Tavernier であつた。一六三二年にメソポタミヤ經由インドに赴き、その歸途一六五二年にバグダードを過ぎている。オスマントルコのムラード四世がその地を征服してから、數年後のことで、東部は周圍約三哩ほどの燒煉瓦の城壁でかこまれ、處々に稜堡があり、外側には深い堀があつた。人家の密集しているのは長さ約千五百歩(ペース)、幅七八百歩(ペース)位の地域で、他は雜草離々たる廢墟であつたという。(一五六)

タヴェルニエーよりも更に百年ほど後に、デンマーク人カルステン・ニーブール Karsten Niebuhr がアラビヤ探險旅行の歸途、この地を訪れている。それは西紀一七五〇年ころのことであつた。當時トルコ政府の置いた州の官衙はティグリスの東岸にあり、それを中心とした市街の周圍を古い城壁がとりまき、四つの城門があつた。その東部の護符門 Bāb at-Talism にはアッバース朝第三十四代のカリフ・アン・ナースィル an-Nāṣir (1180—1225) が刻せしめた碑文が殘つていたし、まだイブン・バットゥータも傳えているムスタンスィル學園の遺址も見ることが出來たと云つている。(一五七)

これらの諸記錄にとどめられたバグダードはティグリス河畔の一地方都會の姿で、一度び受けた深い創痍から遂に再び舊の姿には戻れなかつたことを示している。

ニコルスン氏はそのアラビヤ文學史中で

「フラグの時代から、ティグリスの東と西とは、いよいよ擴がりゆく深淵に隔てられることとなつた。中亞のサマル

カンドから西班牙のセビーリヤに及ぶ世界には、中世期の長期間にわたり、二民族、卽ちペルシャ人とアラブ人との協力により、文藝上、科學上の最高文化の發達を見た。しかし、これが今や全くその提携を解いたのである。兩者間の分裂がその數百年前から始まつていたことは眞實で、バグダードの陷落以前から、ペルシャ民族の天賦の才は華々しい民族文學の形で表現されていたのである。しかしフラグの來攻のとき以後は、ペルシャ人はアラビヤ語使用を事實上神學や哲學上の書きものにのみとどめることになつた。ペルシャ語はその競爭相手（アラビヤ語）を他の分野から驅逐したのである」と述べている。(一五八)

すでに本論中に示した如く、アッバース朝の宮廷を中心とした文化には濃厚なペルシャ的色彩が見える。そのことは、同王朝最後のカリフたるムスタァスィムをめぐる人々の官職名や、生活樣式などからもよく窺うことが出來るのである。アラブ、ペルシャ（イラン）兩民族の提携の上に榮えたのがアッバース朝の文化であり、その提携の鎹となり楔となつていたのがカリフ政權であつた。故に同政權が脆弱になればなるほど、イラン族の政治上、文化上の獨立の機運は熟して來たものと見得るであろう。しかし乍ら、イスラム敎という强い宗敎組織によつて一度び結びついた兩民族は、何か强い衝擊でもない限り、はつきりした分離の機會を得ないでいたのである。

とは云え、一面から見ればそのイスラム敎組織からさえも、シーア派が分裂し、イラン人の多くがこれに歸依して正統派（スンニー）と對立の形勢を示していた。蒙古軍の來襲に先立ち、カリフの宮廷內にも、その膝下のバグダード市內にも兩敎派の葛藤があつた。シーア派中にはカリフの政府を怨恨するものが多く、一度び蒙古軍が殺到するや、これに內應するものが相當數現われたことは旣に述べた如くである。

宰相ムアイヤッドッ・ディーンの如きもシーア教徒の一人で、前述の如くフラグに內通した逆臣であつたが如く傳えている史料もある。果してそうであつたかどうか、頗る疑問であるが、他の權臣等が多くは虐殺されたのにも關わらず、彼はバグダード陷落後もフラグに用いられ、依然として宰相の重職に留まつたことは事實である。世人がこれに鋭い非難を浴せたことも當然と言わねばなるまい。(一五九) こういう事實もまた、スンニー、シーア兩教派の對立の深刻だつたことから起つたものと考えられるのである。

もう一つバグダードの再起不可能となつた原因として擧げることが出來ると思われるのは、經濟力中心の移動である。西紀九八六年ころに、その地理書を完成したアル・マクディスィー al-Maqdisī (またはal-Muqaddasī,Shams ad-dīn Abū Abdallah Muḥammad b. Aḥmad b. abī Bakr al-Bannā al-Basshārī) はその頃、すでに「かつては壯麗な都會であつたバグダードも、今や荒廢と衰頽のうちに墜ちつゝあることを知るがよい。……今日のエジプトのアル・フスタート (古カイロ) は丁度昔日のバグダードの如くである。私はイスラームの世界でここよりもすぐれた都會のあることを知らない」と書いてる。(一六〇) これに據ればイスラム世界に於ける經濟上の中心は既に十世紀末にはエジプトに移りかけていた如くである。この問題はなお輕々しくは取扱えぬけれども、少くとも、そういう徵候が見えるほどであつたという程度には受取つてよいであろう。また西曆一一八四年の五～六月にここを訪れ十三日間滯在したスペインのイスラム教徒イブン・ジュバイル Ibn Jubayr は、古い都市で、ひきつづきアッバース・カリフ朝の都ではあるが「その(繁榮のあとは概ね消え去り、殘るは名聲のみである」とか、往時に較べれば「凋落の廢墟、洗い去られた遺跡、亡靈の像にも似ている」などと記している。(Riḥla, 1907, Leiden. p 2, 17) それで一度びバグダードが蒙古軍のため壞滅的

打擊を受けてからは、到底昔の狀態にまで復興する氣力はなかつたものと思われるのである。

右の如く既に深い龜裂を生じていたイラン、アラブ兩民族の提携を曲りなりにもイスラム世界の支配者という傳統を以つて維持し、ひいてはアル・フスタートなどに較べて衰退の色のあるメソポタミヤの中心都會バグダードの名聲をも支持して來たのはアッバース王朝の存在であつた。今やこれが崩壞し去ると共に、二大民族の分離は急速に實現した。それによつてイラン文化とアラブ文化も分離し行くのである。このことは勿論、イスラム文化史上の重大現象ではあつたけれども、すでに不可避の趨勢であり、一朝一夕に起つた事でないから、やむを得ないと考えられる。しかし乍ら、その際に登場したのが、イスラム文化に理解のとぼしい蒙古民族であつた事は一層の不幸であつた。

エウフラテス・ティグリス二河中流以南の平野は、數千年前から大規模の灌漑施設によつて開發された所であつた。かかる傳統、技術に理解のない高原アジヤの遊牧民族が新しい支配者として來り臨み、しかも鞏固な政府をも建設し得ないとすれば、その結果は自ずと明かである。蒙古軍の來襲は、單に五百年の蓄積によるバグダードのイスラム文化を滅ぼしただけではなく、この大都會を育生した母胎たるイラーク平原の漸次荒廢する因となつたのである。勿論、バグダードを中心とするアッバース朝の文化は、一つにはアラブ、イラン二民族のイスラム教による連繫のために開花したのであるが、更に一つ、その溫床としての二河にそう豐穰な沃野、その產む物資と人衆とが原因となつている。アッバース朝は滅亡するとも、その後に强力な政權が生れて、この沃野の繁榮を永續せしめ得たならば、バグダードは一度びは滅ぶともその後身またはこれに代るべき中心都市が興り、アッバース朝下のバグダードに比較して決して遜色のない文化を開花せしめたことと思われるのである。しかるに母胎たるイラークの平原が全般的に荒廢し、人口は疎散し、雜

犬も聲を絶つまでの寂寞たる飢餓と貧慘の巷となり終つたのでは、到底バグダードを昔日に劣らぬ姿に歸すことは出來ないであろう。蒙古軍の來襲がバグダードに、イラーク地方に、ひいてイスラム文化全般にあたえた悲痛極りなく、取り返えしの出來ない大損失は結局この點にこそあつたのではないかと私は考えている。

バビロン、マダーイン（クテスィフオン）など古代からイラークの中樞都會として繁榮した諸都市の後を承け、特に西紀八世中葉以後から、非常な盛觀を展開したバグダードは、一度び蒙古軍の兵火を受けてより、前述の如く世界における文化の大中心の一つとしての資格は失つたけれども、その地方の中心都會たる地位は失うことなく、ひいて今日のイラーク王國の首府となつている。しかし、十七世紀の中頃、タヴェルニエーの訪問の際は、僅に人口一萬四千人位の小都會であつた。その後やや回復したが一八三一年の疫病流行後には三萬人位に過ぎなくなつた。同世紀後半、トルコ總督ミトハット・パシャ Midhat Pasha の在任時代には市況は活潑となり、大發展を遂げたと言われているが、大約二十萬人位に達したに過ぎぬ。イラーク王國の首府となつてから大に近代化しつゝあるとはいうが、一九四一年度の概數は三十四萬人位で、現在は大約四十九萬九千人餘とされている。(一六一) アッバース朝の盛時に二百萬と唱えられた殷賑さには及ぶべくもない。

單に人口の點のみでなく、曾つては世界一流の文化の中心だつたものが、現在は總じて後進國と目せられるアラブ諸國中に於いてでさえ、エジプトのカイロ、レバノンのベイルート、シリヤのダマスクス等に比較して、寧ろ遜色もあるのを見れば、よくこの間の事情を窺い得るのである。

ただ、サラセン文化圏中の恒星的存在であつたバグダードが蒙古軍の兵火のうちに滅び去つた際に、數多くの民族が

彼我の陣營に屬して活動したため、これら諸民族の記錄、說話の類が火花の散亂する如く一時に迸出していることには深い興味を惹かれるのである。その火花はよし瞬間的のもの、刹那の光茫であつたとするも、しかもその間に、よく滅びゆくこの大都會の文化の特質を異常なまでに明瞭に照らし出している。崩潰する城壁を繞つて叫喚した諸民族の殘した斷片的資料を拾集し、イスラム文化の特質を考える有力な手がかりとし得ることは、せめてもの慰めでなければならぬ。

註

（六六）この書は一二九六年にカイロで起稿し、一二七四年同地で完成をつげている。（cf. Brockelmann: Geschichte, vol. 1, pp.326—327) Nicholson はこの書に對し「アラビヤ文學中、最も特色に富み、有益で、また興味深い書物の一つ」と評している。(cf. R. A. Nicholson: A Literary History of the Arabs, Cambridge 1930, p. 479)

（六七）イブヌッ・ティクタカーの書中、バグダード陷落に關する部分は、アラビヤ語原文とフランス語譯文が Silvestre de Sacy: Chrestomathie Arabe, Paris 1806 に收められている。またこの書のアラビヤ語原文は W. Ahlwardt (Gotha, 1890) H. Derenbourg (Paris, 1895) らの校刊本が現れている。またエミール・アマル Émile Amar の佛語全譯もある。(Al-Fakhri. Histoire des Dynasties musulmanes depuis la mort de Mahomet jusqu' à la chute du khalifat 'Abbāsīde de Baghdādz par Ibn aṭ-Ṭiqtaqā, Paris 1910—Archives Marocaines vol. XVI) 更にWhitting, C. E. の英譯本も出ている。(Al Fakhri…London. 1947.)

（六八）E. G. Browne: A History of Persian Literature under Tartar Dominion, Cambridge 1920, p. 66.

（六九）この書の正式の標題は「土地の分配と時代の推進」Tajziyatu'l-Amṣār wa Tazjiyatu'l-A'ṣār と言うものであつた。(cf. Browne: ibid p. 67)

（七〇）Ibid. p. 67.

（七一）G. D'Ohsson: Histoire des Mongols, Amsterdam 1834, vol. 3, p. 265.

（七二）P. M. Quatremère: Histoire des Mongols de la Perse, Paris 1836, préface 4,85,99.
Browne: Persian Literature under Tartar Dominion, pp. 100—.
E. Blochet: Introduction à l'Histoire des Mongols de Fadl Allah Rashid Ed-Din, Leiden 1910, p. 99.

（七三）Browne: Persian Literature under Tartar Dominion, p. 101.

（七四）ペルシャ語原文は Blochet: Introduction à l'Histoire des Mongols, pp. 98—99 に掲載してある。ブローシェ氏は 'ārif を「形而上學に通暢した人」"Celui qui est arrivé à la connaissance métaphysique" と解釋してゐる。(cf. ibid. P. 100)

（七五）Blochet: Introduction, p. 100, p. 395.

（七六）Ibid. p. 99 note 2.

（七七）Ibid. p. 99.

（七八）I bid, p. 99 note 2.

（七九）Émile Amar: Al-Fakhrī, p. 571.

（八〇）D'Ohsson: Histoire des Mongols, vol. III. p. 206.

（八一）Al-Fakhrī, Paris 1910, pp. 579—582.

（八二）Howorth: History of the Mongols, Part III, p. 115.

（八三）Rashīd-Eldin: Histoire des Mongols de la Perse (publiée……par P. M. Quatremère), pp. 232—33.

（八四）Ibid, pp. 233—247.

（八五）Mediaeval Researches, vol. 1. p. 139, note 373.

（八六）Rashīd-Eldin (Quatremère) p. 249.

（八七）Ibid, pp. 211—214.

（八八）al-Ḥasan b. Muḥammad b. Ḥasan aṣ-Ṣāghānī は回教暦五七七年（西紀一一八一—八二）にインドのラホールで生れ、回暦六五〇年（一二五二）にバグダードで歿した。(cf. Emile Amar: Al-Fakhrī, p. 580, note 3)

（八九）西紀一一九〇年マダーイン Madā'in (Ctesiphon) に生れ、同一二五七年バグダードで歿した。(cf. Brockelmann: Geschichte der Arabischen Litteratur, vol 1, pp. 249 or 282)

（九〇）Ibn aṭ-Ṭiṭṭaqā: Al-Fakhrī (Emile Amar), pp. 580—581.

（九一）Rashīd-Eldin (Quatremère) pp. 249—55.

（九二）Howorth: History, part III, p. 115 所引 Abulfeda の世界史 vol 4, p. 551.

（九三）ペルシャ史書に現われる bakhshī については梵語の bhiksu に當るとする説や、それを排して、シナ語「博士」pâk-dz'i の音譯とするペリオ氏の意見 (cf. P. Pelliot: Notes sur l'Histoire de la Horde d'Or, Paris 1950, p. 9, note 2.) などがあり、また D'Ohsson (Histoire des Mongols, vol. III, p. 225) はこの言葉を docteur bouddhiste と譯している。マルコ・ポーロはこれを bacsi と呼び、詳細な説明をしている。(岩村氏、マルコ・ポーロの研究、上、頁二八二—二八七) 要するにポーロはタントラの儀式を行うラマ僧のことを指していることは明かであるが、陝西省盩厔縣の萬壽宮にある元の太宗の聖旨碑（一二三五年）には「八合識」とあつて道士李志常をさしている。蔡美彪氏は、これは蒙古語中の突厥語借字であるとし（元代白話碑集錄、頁三、註一）Louis Hambis氏は、モンゴル語のbakhshiは宗教上の師父、教團の長老を意味し、チベット語の lama に相當し、東トルコ語やペルシャ語にも入つて、もろもろの知識の大家の意味を帶びるようになつたと説いている。Marco Polo: Description du Monde, Paris, 1955. p. 384. note 97.

（九四）Rashīd—Eldin (Quatremère) pp. 264—265.

（九五）Hamadān から Kirmānshāhān に向う公路上にある町で Alvand Pass を西に越えた所にある。

（九六）Rashīd-Eldīn (Quatremère) pp. 266—267.

（九七）Ibid. p. 281,

（九八）Al-Fakhrī (Emile Amar), pp. 577—78,

（九九）Rashīd-Eldīn はこれを Tūtāl と書き、ジュチの孫としているが、P. Pelliot (Horde d'or, p. 186)によれば Tutar を Jüči の曾孫であるとしている。

（一〇〇）P. Pelliot (Horde d'Or, p. 46) によれば Shirämün は Ògödäi の孫で、Salomon のトルコ語化した形であるとしている。

（一〇一）D'Ohsson: Histoire des Mongols, vol. 3, pp. 232—233 に引用された Waṣṣāf の所傳。

（一〇二）Minhāj-i-Sirāj はバグダード陷落と時を同じくして在世した人物で、その史書 Tabaqāt-i-Nāṣirī を完成したのは一二六〇年九月であつた。(cf. E. G. Browne: Literary History of Persia, vol. II, p. 470) 彼は西紀一一九三年頃に中央アジヤのバルフ Balkh で生れたが、その史書を執筆したのはインドに於いてであつた。

（一〇三）Howorth: History of the Mongols, Part III, pp. 123—24 所引 Ṭabaqāt-i-Nāṣirī.

（一〇四）Rashīd-Eldin (Quatremère) pp. 290—293.

（一〇五）Howorth, Part III, p. 124.

（一〇六）Rashīd—Eldin (Quatremère), pp. 298—301.

（一〇七）D'Ohsson: vol. III, p. 240 引引 Waṣṣāf.

（一〇八）Howorth, Part III. pp. 125—126.

（一〇九）D'Ohsson: vol. III. p. 240 但しこれは Ṭabaqāt-i-Nāsirī に基いた所說で、Rashīd-Eldin によれば妃嬪七百人、宦者一千人とある。(cf. Quatremère, p. 301)

（一一〇）Rashīd-Eldin (Quatremère), p. 303.

（一一一）D'Ohsson, vol. 3, p. 241. 四十日間も續いたとする異說もある。(cf. Le Strange: Baghdad during the Abbasid Caliphate, p. 343 ハンビス氏は十七日間としている。(Louis Hambis: Marco Polo, Paris 1955. p. 358. Note. Morte

du Calife)

(一一二) Le Strange: Baghdad, p. 343.

(一一三) Diyārbakrī (1574 A. D 歿) Ta'rīkh al-khamīs に引用された adh-Dhabhabi の Duwal al-Islām 中の一節 (cf. Nicholson: Literary History of the Arabs, p. 446)

(一一四) Howorth: part III. p. 127.

(一一五) Ibid. p. 127.

(一一六) D'Ohsson: Histoire, vol. 3 p. 238. イブン・タグリビルディーは西暦一四一一年カイロに生れ、名をユースフ Yūsuf といつた。マクリーズィーについて學び、一四六九年に歿している。

(一一七) Le Strange: Baghdad, pp. 342—343.

(一一八) E. Browne: Literary History of Persia, vol. II, p. 463.

(一一九) Al- Fakhrī (Émile Amar). pp. 578—579.
Silvestre de Sacy: Chrestomathie Arabe, vol. 1, p. 63.

(一二〇) Rashīd-Eldin によればフラグが選擇したのはククフ村 Badīyah Waqf とジャラーブーヤ Jalābīyah 村であつた。(Quatremère, pp. 303—4)

(一二一) G. Le Strange: The story of the death of the last Abbaside Caliph, from the Vatican MS. of Ibn-al-Furāt (Journal of the Royal Asiatic Society, April, 1900)
Yule: Travels of Marco Polo, vol. 1. pp. 67—68, note 7.

(一二二) Howorth: History, Part III. p. 127.

(一二三) Quatremère: Histoire des Mongols de la Perse, p. 305.

(一二四) Quatremère: Histoire des Mongols de la Perse, p. 304, note 4.

（一二五）Al-Fakhrī (Émile Amar), p. 579.

（一二六）Howorth: History, part III. p. 128.

（一二七）D'Ohsson: Histoire, vol. III. p. 243 note 1.

（一二八）Howorth: ibid. pp. 128—129. Journal Asiatique, 5th Série,X1, pp. 490—91.

（一二九）岩村忍氏「マルコ・ポーロの研究」上卷頁七九—八二

（一三〇）D'Ohsson: Histoire, vol III. p. 243 note 3.
Howorth: History, Part III. p. 129.

（一三一）Haython: Histoire orientale, chap. 26.
Joinville: Histoire de St. Louis, édit. de Capperonnier, p. 122. D'Ohsson, vol. III. p. 244. Yule: Marco Polo, vol. 1. p. 67 note 7.

（一三二）Ibn al-Furāt の史書とは Ta'rīkh ad-duwal wa'l-mulūk のことであろう。(cf. Brockelmann: Geshichte der Arabischen Litteratur, vol. II. p. 50 及び Le Strange: The story of the death of the last Abbaside Caliph, J. R. A. S., April 1900, pp. 293—300)

（一三三）Le Strange: Baghdad, p. 260.

（一三四）al-khamr はすべて醸成した飲物を指し、ひとり葡萄酒のみでなく、棗椰子の果汁から製したものをも指した如くである。その禁のことはコーランの第二章二一六節、第五章九三節などにある。

（一三五）Nabīdh も葡萄、棗椰子等の果汁を軽度に醗酵させたもので、ひとり棗椰子のみから製するものではない。

（一三六）Hitti: History of the Arabs, p. 337.

（一三七）前嶋信次「舍利別考」（回教圏昭和十四年六月號）R. Dozy: Verklarende Lijst der Nederlandsche Woorden, die uit het arabisch, hebreeuwsch, chaldeeuwsch, perzisch en turksch afkomstig zijn, Haag 1867, pp. 87—89.

M. Devic: Dictionnaire étymologique dos mots français d'origine orientale, Paris 1876, p. 206.

（一三八）P. Pelliot 氏は哈昔牙をシリヤ語 hasia（聖者の義）の音譯で、ネストル教の司教の稱號であるとしている。(A. C. Moule: Christians in China, before the year 1550, London 1930, p. 147 note 9) 元史百官志（卷八九）に「崇福司……掌領馬兒哈昔、列班、也里可溫、十字寺祭享等事」とある。

（一三九）賽典赤が Bukhārā の出身者であることを傳えたのはラシードッ・ディーンで Sayyid Ajall Bukhārā としている。(cf. A. Vissière: Biographie du Seyyid Edjell Chams ed-Din Omar (D'Ollone: Recherches sur les musulmans chinois, Paris 1911, pp. 26—27 et note 2)

（一四〇）筆者の「舍利別考」はその方面にやゝ力を注いだものである。

（一四一）Al-Fakhrī (Émile Amar), p. 571.

（一四二）この人物は西紀一二五二年ころ ash-Sharafiya fi'n-nisab at-ta'lifiya という音樂理論に關する書を著した。(cf. Brockelmann: Geschichte der Arabischen Litteratur, vol. 1, p 496 note 3) Émile Amar が巴里國立圖書館所藏稿本中の Khalīl b. Aibak aṣ-Ṣafadī 著 Al-Wāfī bil-wafayāt 中で見出した所によれば回曆六九三（一二九四）ṣafar の月廿八日に歿したとある由である。(cf. Al-Fakhr, p. 87 note 1) してみれば、バグダード陷落の際には難を免れたものと見える。

（一四三）H. G. Farmer: A History of Arabian Music to the XIIIth Century, London 1929, p. 210.

（一四四）Bretschneider: Notes on Chinese Mediaeval Travellers to the West, Shanghai, 1875, p. 84.
idem: Mediaeval Researches, vol. 1, p. 140.

（一四五）岸邊成雄氏「回教音樂東漸史考—元朝の回教樂器—（回教圈第七卷第四號頁三四—三五）

（一四六）Richard Croke: Baghdad, the city of peace, London 1927, p. 72.

（一四七）H. G. Farmer: A History of Arabic Music, London 1929, p. 197 所引 Ikhwān aṣ-Ṣafā' (Bombay Edit.) pp. 100—101.

（一四八）Ibid, p. 197 所引 Alf laila wa laila (Calcutta Ed.) vol. ii p. 87.

（一四九）D'Ohsson: Histoire des Mongols, vol. III, pp. 246—248.

（一五〇）Ibid. pp. 250—254 所引 Ibn Tagribirdi: 3e partie.

（一五一）Marāṣid al-iṭṭilā' alā asmā' al-amkina wal-biqā' は Abū'l-Faḍā'il Ṣafiaddin 'Abdal-mu'min b. 'Abdalḥaqq (1338 A. D. 歿) の手になり、Yāqūt の Mu'jam al-buldān（地理集成）を基礎とし、或る場合には省略し、或る場合には新材料を附加したりして出來たものである。

（一五二）岩村忍氏「マルコ・ポーロの研究」上卷頁七八—七九

（一五三）Rashid Eldin (Quatremère), p. 303.

（一五四）Voyage d'Ibn Batoutah, vol. III. pp. 107—109.

（一五五）Le Strange: Baghdad, p. 347.

（一五六）Ibid. pp. 348—349. Tavernier: vol. 1. pp. 230—239.

（一五七）Le Strange: Baghdad. p. 153.

Niebuhr の旅行記は Beschreibung von Arabien, Copenhagen 1774 を底本とし、R. Heron の英譯本 (Travels through Arabia, Edinburgh 1792) や獨佛譯本もある。

（一五八）R. A. Nicholson: Literary History of the Arabs, Cambridge 1930, pp. 446—447.

（一五九）ラシードッ・ディーンによれば、この人はバグダード陷落後、久しからずしてその年五月に歿し、その子シャラフッ・ディーン Sharaf ad-Dn Abū'l-Qāsim 'Ali がついだとある。(Quatremère, p. 313)

（一六〇）Al-Maqdisī: Kitāb aḥsan al-taqās m f m'arifat al-aqāl m. (Bibliotheca Geographorum Arabicorum, Tome III) p. 36.

（一六〇）Encyclopaedia of Islam, Baghdad の項。Whitaker's Almanack, 1941. The World Almana'c, 1955. など。